教科書ディスクールにおける‘我々意識’の構築の様子
—韓国の 1970 年代と 2000 年代の小学校国語教科書の比較を通じて

The Discursive construction of “Weness” in school textbooks
- through a comparison of the South Korean elementary school language textbooks of the 1970s and the 2000s.

SoonHee Fraysse-Kim

This study explores the organic relationship between ruling ideology and school education. It tries to confirm, trough a systematic analysis of school textbooks, how the modern school system is mobilized and used in order to establish, propagate, maintain and reproduce the ruling classes value norms. This study compares and contrasts two sets of language textbooks covering the six primary school grades used in the 1970s with those currently in use (2000~). In South Korea, elementary schools textbooks are compiled by the authorities and the curriculums have been changed following the change of regime. As for the textbooks used in the 1970s, they were revised according to the national authoritarian ideology of the military regime of Park JongHee, prioritizing anticommunism and economic development as of the utmost national importance. The textbooks in current use were revised following the accession to power of the Democratic Party of longtime oppressed political leader Kim DaeJung. Therefore, the contemporary textbooks consist of an *anti-discours* to those of the 1970s, which strives to establish a new social order, or even make a clean break with the past. Despite ideological differences, the textbooks of the two periods both emphasize a very strong spirit of national consciousness, illustrated by the frequent use of the term *Wuli* which means ‘we’ and also ‘our’ in adjective form. This study aims to show how the discursive construction of “Weness” (*wareware ishiki* or national identity) in Korean language textbooks is articulated in the relationship between *le Même* and *l’Autre* and how the identities of *le Même* and of *l’Autre* are changed, modified and corrected according to the change of the leading ideology. This study is based on the noun-centered analysis of vocabulary, and pays particular attention to the use of *Wuli*.

はじめに

CDA つまり批判的談話分析 (Critical Discourse Analysis) は , ディスクールに埋め込まれたイデオロギーや社会的不平等を暴くことを目的に批判的な視点で談話を分析する（Zinken 2003; Wodak1999, 2003 ; van Dijk 1995, 2003）。本論で小学校の国語教科書を対象に批判的談話分析を行うがここで既に想定されるのは学校は国家イデオロギー装置であり学校教科書が支配イデオロギーの伝播の中心的メディアであるということである。この場合、「資料選択の恣意性」（石部 2005:6）を尋ねることができるかもしれない。しかし実際に教科書ディスクールを批判的な視点

で分析した研究はあまり見当たらない[1]。人々は常套的知識や型にはめられた言い方を‘教科書的知識’と軽蔑的に言い、教科書の知識を周知の事実、当然なしかも融通性が聞かない固定的なものとして扱う。しかし時には教科書の知識の公的な性格が指摘され、いわゆる事実の‘歪曲’問題が国家間の問題になる。けれども教科書とイデオロギーがどれほど深く係っていて、それが幼いときの子供の世界観や価値観の形成にどれほどおおきな影響をあたえるかについては実感していない。批判的談話分析の主関心がディスクールに埋め込まれたイデオロギーを暴くことならば、CDA 研究におけるなにより先立つものは次世代に支配イデオロギーによる意識化が大衆的しかも強制的におこなわれる現場を直撃することからはじまらなければならない。また教科書ディスクールを批判的に分析することは特定社会における特定時期の支配イデオロギーの性格の把握におけるなにより効果的な方法であると思われる。

本論は、支配イデオロギーと教科書の有機的な関係を探る。本論は現代の学校制度が当該社会の支配階級の価値規範の伝播と維持そして再生産のため動員・利用されている現象を、韓国の学校教科書ディスクールの実証的分析を通じて明らかにすることを試みる。

韓国の教科書制度は国定制度であり、教育課程は政治･社会的変化、特に政治理念の変化に従って変わってきた。1970 年代の小学校国語教科書は、反共・経済発展に基づく国家権威主義イデオロギーが最も膨張した維新体制[2]下で、いわゆる「国籍ある教育」を標榜しながら改正されたものである。 一方 2000 年の小学校の教科書は、1970 年代から続いた民主化運動が実り、民主化の主導人物であった金大中氏が大統領に就任することに伴って改正されたものである。そのため各時期の教科書に反映されている支配イデオロギーは互いに対立的性格を持っていることが予測される。

本論では、韓国の 1970 年代と 2000 年代の教科書のディスクールを対立の関係で捉えて、それぞれの教科書のイデオロギ–的主体の形成を補佐する‘内’と‘外’の捉え方の違いを、社会組織や身分名を示す名詞と「ウリ：我々、我々の」の使用様子の比較分析を通じて考察する。また固有名詞つまり歴史的事実・人物名の出現様相を比較して、教科書のなかの「有意な過去 significant past」(R.Williams 1976) の提示がどのように変動していくのかを探る。さらに支配イデオロギ–的操作が教科書デイスクールのなかにどのように構造化されているかを明らかにすることによって、教科書デイスクールの本質を明白にする。

第 1 章では先行研究を基に支配イデオロギーと学校教育の有機的な関係を探る。第 2 章では韓国の 70 年代と 2000 年の間に起きた社会的変化を概観する。第 3 章で分析方法及び分析資料を紹介してから、第 4 章で両時期の教科書の比較分析を行い、その結果を解釈・考察する。

---

1 例えば韓国の「国語教育学会」によって取り上げられた 1990 年から 2002 年までの国語教育に関する博士論文 24 編のなか国語教科書を対する批判的談話分析を行った論文は一編もなかった。(『国語教育研究の反省と展望』2003)

2 1972 年 10 月 17 日，当時の大統領朴正熙が長期集権を目的に断行した超憲法的非常措置。この措置によって維新体制が成立され 1979 年 10 月 26 日大統領が殺害されるまで 7 年間持続された。(『DUSANDONGA 百科事典』)

第１章　イデオロギー・ディスクール・教科書

1960 年代後半から 1980 前半までの韓国は徹底的な反共主義に基づく軍事独裁政権の時代であった。その時われわれは学校で世の中は共産主義と民主主義によってきちんと２分されており、全ての悪は、既に常に、共産主義陣営に、全ての善は民主主義陣営に属することは疑いない事実であると教えられた。反共・民主主義は至上の価値であり経済成長は国民的使命であった。北朝鮮の政府は退けなければならない悪の徒党であり、北朝鮮の人民は救い難い敵の群れであった。恐怖は鉄のカーテンの向こうからくるものであった。仲間か敵か、黒か白か、その時のわれわれにとって世の中の秩序はこの上なく明白で単純だった。

冷戦が終結すると事情が大きく変わる。冷戦の終焉と自由民主主義を掲げる文民政府の出帆に伴って韓国の社会ではイデオロギーの入れ替えが行われるようになる。従来の反共産主義は‘時代遅れ’のイデオロギーになり、統一イデオロギーに基づく民族主義の風が吹き始める。韓民族（韓国・朝鮮民族）は一つに固まらなければならないという思想に基底する「ハナロ（一つで）」運動のなかで、かつて‘悪の群れ’であった北朝鮮の人民が、同一民族・兄弟としてアピールされる。ゆえにそれは民族統一の問題を超え、世論を作り上げ、スポーツ応援などの社会のあらゆる領域で‘国民一致’の感情を呼び起こす原動力になっている。

しかし、それまではそれを崩壊することが最優先課題とされてきた敵対集団に対してどうしたら同族意識が目覚められるのか？

マルクス（K. Marx）は、政治、法律、道徳、宗教などの人間の精神的産物は、人間の実質的生の営みのなかの物質的活動や交流と相互作用しているといった。人間は物を生産するように思想や観念をも生産し、このような精神的生産物は言語を通じて具現化する。しかし道徳、宗教、形而上学などは、結局のところイデオロギー的変種にすぎず、独自の進化の歴史を持つことはない。それは、単に人間が物質的生産・交流の活動を展開する際、自らの存在条件を変える過程に作り出す意識の一形態にすぎない。意識は人間の物質的生の営みの過程の昇華物であり、「人間の頭脳に形成された虚像（the phantoms formed in the human brain）」なのだ。かくして人間の生が意識によって左右されるのではなく、人間の現実的存在条件によって意識が限定されるのである（Marx & Engles1964:37-38）。

そもそも我々は北朝鮮について何一つも知らないまま、それに対して一般に言われること、つまり社会のなかで常識化されている北朝鮮に対するディスクールをとおしてそれを‘意識’していたのではないか？　そして風の向きが変わるように、‘統一ムード’に伴って今度は‘北朝鮮＝兄弟・同胞’のディスクールの普及の真っ直中に置かれているのではないか？　というのも、分断以来今まで、朝鮮半島のイデオロギー的対立状況や、韓国に対する北朝鮮の外交姿勢には変わりがないのである。つまり一人独裁の完全統制社会における北朝鮮の姿は 70 年代も今もそのままであるのに、韓国の社会では彼らのイメージが‘悪の群れ’から‘兄弟’へと変化しているのである。

結局、北朝鮮の人々が悪の群れになるのも、可憐な兄弟になるのもイデオロギー的働きにすぎず、われわれが取り組んでいるのは現実と関係のない「頭脳に形成された虚像」でしかないので

ある。しかし北朝鮮の人々を‘悪の群れ’だの‘兄弟’だのとみなすようそそのかすそのイデオロギーのために、時には人々の命が捧げられ、教育が犠牲されるのである。言い換えると、イデオロギーのために教育システムが総動員された結果、人々は‘愛国’の名で自らの命を自発的に捧げる事態まで起こりえるのである。

イデオロギーは「一つの人間集団によって共有され、この集団にとって不可欠な事柄に関わり、この集団との関係で機能する」信念体系であり、「集団と一体化し、集団構成員に特有の行動や態度を合理化するために役立つ」（プラムナッツ 1972:34）ものである。支配イデオロギーとは支配階級のイデオロギーである（Marx & Engles1964:60）。ある社会共同体のなかで正統的かつ普遍的価値として社会構成員の間に広まっている価値体系は、実際には支配階級の価値体系である。そして支配イデオロギーの作用圏内では支配イデオロギーによって設けられた社会秩序は万人にこの上なく当然なものとして受け入れられる。

アルチュセール (L. Althusser) はイデオロギーを観念ではなく一つの機能としてとらえる。イデオロギーは個人に呼びかけ、個人をイデオロギー的主体に変える「プラチック：実際行為」を通じて実現される。イデオロギー的主体になったわれわれは、われわれの頭のなかに刻まれた意識に従って‘その時、その場でとるべき行動をとる’が、それは実際のところイデオロギー的慣習行為に他ならない（アルチュセール 1993:71-80）。さらにペシュー (M. Pêcheux) は、主体は自分を「理解作業の起点：la source de sens」として認識するだけではなく、意味の適切さは常に「先在する普遍的意味：un sens pré-existant universal」によって保証されていると信じ込んでいるが、これは「幻想」でありこれこそが「言語に関わる主体効果」である (Pêcheux1975:14) と説く。例えば、「フランス兵士は後退しない」のような文は事実「もしあなたがフランス兵士であったら、あなたは後退できない／後退してはならない」という意味を有しており、その時「何者か…すべきである」の関係を示すのは実際のところイデオロギーなのである。言い換えれば、「習慣：habit」と「慣習：usage」、すなわちイデオロギーによって「何か what is」、「何になるべきか what ought to be」が明示されるのであるということである。ペシューは、このようにイデオロギーによって形成されている、「兵士（工場、社長等々）というのが何であるかは周知の事実である」のような考え方のその「周知の事実」の「当然さ」こそ、「言語の明証性」に隠された、「意味の物質的性格 the material character of meaning」なのであると論じる (Pêcheux 1983 :110-111)。つまりディスクールの意味の構築に作用するのは言語的特性ではなく社会的、歴史的要因なのだ。

支配階級の価値体系が社会一般に普遍的価値として受け入れられるのは、支配階級が当該社会の諸イデオロギー装置を掌り、彼らの価値体系が教育的、政治的、文化的、等のあらゆるイデオロギー的装置を媒介に‘正統的’意識として伝播・拡散するからである。支配イデオロギーの最も効果的な伝播は学校教育を通じて行われる。いかなるイデオロギー装置も学校ほど長い期間にわたって、ほぼ強制的に一定の年齢の全国民を対象に自由にイデオロギー操作がおこなわれる装置はないのである（アルチュセール ibid:33-39）。

教科書ディスクールは‘われわれ’の領域に子供たちを呼び込みながらあることばの意味を特定「ディスクール編成 formation discursive」[3]（Pêcheux 1975:10）のなかで通用される意味で把握

[3] 「ディスクール編成」とは，イーグルトンの説明を借りると，「社会生活の中の特定の立場からいかなる発言が出来るか，或はいかなる発言をすべきかを規定する一定のルール」といえる（イーグルトン 1999:406）。

するように導く。つまり個人をイデオロギー的発話の主体として構成しようと努める支配イデオロギーの言語的具現である。ゆえに学校のリテラシー教育課程は社会のなかの「常識化」（M. Foucault1969）されている話し方、表現、読み書き等の諸言語活動の拡散におけるほぼ出発点をなすと考えられる。

イデオロギー作用における国語教科の優れた役割は次の 2 点を通じて想定できる。第 1 の点は、小学校の国語教科はリテラシーの教育の中心メディアである。リュク（A.Luke）によると、学校中心のリテラシー教育は、特定な教科内容と教授法を採択することを通じて、イデオロギー教育の一類型をなしている （Luck1988:20)。つまりイデオロギーは教科書に含まれている内容と、その内容を取り扱う方式によって伝播されるということである。その場合、教科書の内容はそこから得られる知識の量／質を限定するだけでなく、それを基に学習の方式及び事物の理解する方式をも限定させるのである。そのため教科書の内容は社会的に編成・構成された意味のまとまりでありウィリアムズ (R.Williams 1976) の「選別された伝統：selective tradition」にほかならないのである。「選別された伝統」とは、効力を発揮している支配的文化の範囲内で常に「伝統 tradition」、「有意な過去 significant past」としてみなされる知識である。ウィリアムズによると、問題になるのは選別の仕方である。つまり過去から現在までの総体的人間活動の実践から、ある種の意味や慣習が強調される一方で、他のある種の意味や慣習は看過されたり除外されるのである。より重大なのは、ある種の意味や慣習のなか、特定のものは再解釈されたり、弱められたり、時には、支配的文化の他の要素と釣り合わせるため修正されたりするのである。（Williams1976:205）。

第２の点は、一般にいわゆる‘教科書問題’が起きるたび、その批判の対象になるのはしばしば歴史教科書であるという点である。歴史教科書には当該時期の支配イデオロギーによる歴史の解釈が‘記述’されているため、イデオロギー作用が可視的かつ表面的である。一方、国語教科書では、イデオロギー操作が‘このように話す’、または‘このように理解する’という‘同化（assimilation）’と‘説得（persuasion）’の形で行われる。つまり個人をイデオロギー的‘われわれ’に同化させるプロセスが言語使用に組み込まれており、特定知識を教え込むのではなく特定アイデンティティを形成する役割を担っているのだ。特に小学校過程の国語教科を通じて行われるイデオロギーの作用は個人の精神世界のより深いところにまで反響する、より深層的で、陰湿的で、したがって効果的であると考えられる。

第 2 章　韓国社会の変動

1970 年から 2000 年の間の韓国の社会は、あらゆる場面において急速に変化した。この時期の韓国の社会変化における最も画期的な現象は、経済的発展と政治的民主化である。1965 年、韓国は世界で最も貧困な国の 1 つであったが、2000 年代には世界で 12 番目の経済大国になる。

政治イデオロギーの面も変化が凄まじい。30 年間続いた軍部独裁体制から民主社会の時代が到来し、経済発展を中心とする反共産・国防イデオロギーは大衆民主主義に取って代わった。韓

国の社会は、1961 年当時現役軍将校であった朴正熙が 5.16 軍事革命を起こして政権を握って以来、1992 年文民政府が出帆するまで 30 年間軍部独裁が続いていた。特に朴正熙政権下の 1960 〜 1979 の間の韓国社会は、一連の経済計画による高速成長のなかで、反共産主義を基にする経済発展至上主義、国家権威主義の支配イデオロギーが濃厚な時期であった。つまり長い間人々を苦しんでいた貧困からの脱皮をめざす民族中興の道はもっぱら経済成長にあるという信念が政治支配層のなかだけでなく、さまざまな社会集団に広く受け入れられていたのである（カン 2000:234-238）。しかし、この経済発展のイデオロギーの核心は、「単純に民族中興への道が経済発展にあることをとき明かしたのにとどまらず、持続的な経済発展を達成するためには、これに必要な諸条件を迅速に提供することができるよう、政治過程もやはりまた効率的に合理化されなければならないという観点につながっていった」（韓 1988:19）と言われている。言い換えると、経済問題を表面に立たせながら諸社会的国家統制を企んだのである。同時に朝鮮戦争による国土分断以来韓国社会で従来の国家権力の正当化のため既に「拡大･再生産」されてきた「分断意識」（カン ibid:231）、すなわち反共産・国防のイデオロギーが一層強化される。結局「10 月維新」[4]体制以後の第 3 共和国は、極端的反共産主義に立脚する経済発展最優先のイデオロギーによってその正当性が確立された 1 人独裁の社会であった。

1980 年のいわゆる‘ソウルの春’[5]を起点に抵抗を続いた民主化運動の発展と東欧社会主義崩壊による世界秩序の変化といた国際的状況は韓国の社会に大きな変化をもたらした。この変化に中心役割を演じた学生や知識人を中心にする民主化運動の主導勢力は、「民主化の最終的な目的」を「民族統一」におき、「我が民族の文化、価値観を歪曲して、西洋中心の価値観を植え付けてきたアメリカ中心の文化を韓半島から追い出し、我が民族のいきいきとした民族文化を再創造」する「民族主義路線」（梁 1994 :114）を打ち出していた。

1979 年に終結された朴正熙政権に続いて権威主義的統治秩序を固守していた新軍部政権に対する持続的な民主抗争は、ついに 1987 年の 6 月凡国民的民主化示威まで発展し、しまいに軍部政権は弱まり、ついでに 1993 年韓国社会に 30 年ぶりの文民政権を出帆させたのである。1987 年以後現在韓国の社会・政治体制は 20 年以上続いた民衆化運動の結実であるというならばそれは「民主化」というイデオロギー的戦いが持ったらした社会・政治・文化的変化でもある。

軍部権威主義の没落と文民政府の出現、急速な経済発展とともに拡張しつつある市民社会の台頭、さらに 1990 年以後、ソ連及東欧圏の社会主義の崩壊、韓国と北朝鮮の間の経済的格差の拡大などのさまざまな国内外的状況の変化は、韓国社会の反共産主義意識を弱まらせた。今日の韓国の社会で反共主義は「これ以上支配的なディスクールにはなれない。（…）他の諸社会的問題を無力化してきた激烈な情緒的反共主義は消えていきつつある」（グォン 2000:36）いわば ‘時代

[4] 1972 年 10 月 17 日，当時の大統領朴正熙が長期集権を目的に断行した超憲法的非常措置。この措置によって維新体制が成立され 1979 年 10 月 26 日大統領が殺害されるまで 7 年間持続された。（『DUSANDONGA 百科事典』）

[5] 1979 年の当時大統領朴正熙の暗殺事件から 1980 年の 5 月初まで起った民主化運動。当時金大中などの野党指導者を始めて学生、労働者、農民、一般市民など社会の諸階層から民主化を要求する大衆的運動が激しく起ったが、新軍部勢力は戒厳令を布告、民主化人士を拘束、国会と政党を解散させる。それに抵抗して同年 5 月 18 日クァンジュで行なった学生集会を政府が武力で鎮圧する過程で流血事態が拡大し、大勢の市民が命を失う「クァンジュ民主化抗争」が起きるようになる。（梁 1994、『DUSANDONGA 百科事典』）

遅れ’のイデオロギーになっている。

グォンは、「社会主義圏の崩壊後、南韓（韓国＊筆者註）の経済的・政治的優位が立証されたと信じるようになってから北韓を‘意識’する強度が顕著に弱くなっている」と言い、現在韓国社会の反共主義の衰退は、それが「資本主義イデオロギー–個人主義」に代置される過程の現象であると指摘している（グォン ibid:36-37）。

貧困からの脱出を掲げ、経済発展至上主義の下で全国民を黙らせた独裁政権を経て、いまや韓国社会では、生活の質が論議され、様々な市民団体の活動が目覚ましい大衆民主主義の時代が到来しつつある。変動の社会のなかに、衰退した経済発展・反共・国防に基づく民族中興のイデオロギーに対して代置物として浮上したのは、私的領域に属する大衆媒体、教会、労組、スポーツ界などであり、韓国社会では大衆文化的様相が加速化している。

一方、解放以後韓国人の「価値観及び歴史観」の中で一つの固定観念として存在し続けているのは「植民地の経験」と「分断体制」及び「近代化」の問題であると言われている。「植民地の経験」つまり反日感情は、韓国社会に「民族主義が持続する契機」を与える一方で、「分断体制」は社会のなかで危機意識を助長しながら国民統合を図るとともに経済発展の重要な役割を果たしてきた。すなわち分断問題は「近代化」の問題と連結されることで合理化されてきたのである（パク 2005: 285-286）。つまり「植民地の経験」と「分断体制」そして「近代化」の問題は、政治イデオロギーに利用され、良くも悪くも、韓国社会の政治・社会・経済的発展及び変化における誘発力ないし原動力としての役割を果たしてきたのである。

パクのいうとおり、対日感情、朝鮮半島の統一及び産業発展の問題は、常に歴代の政権の政治的課題であると同時に権力の正当化における政治イデオロギーに応用されてきた。特に韓日間の「過去清算」（リ 2005:279）が未解決のままであると主張される現状のなかで、「植民地経験」は‘癒えない傷口’として残り、常に韓国人の反日感情の源をなしている。

かくして韓国社会に潜在化された民族主義は、「分断体制」の問題とともに、1970 年代の政権下では強力な「反共民族主義」として、1990 年代に入ると「統一民族主義」として活性化されるのである（パク ibid:295）。

第 3 章　分析

3.1　分析方法

分析方法は主として頻度と共起模様の観察を基にするコーパス言語学的分析 (Stubbs1996, 2001) を用いた名詞中心の語彙分析である。分析の大枠は次のとおりである：

（1）両時期の教科書の語彙量に合わせて調節した一定の頻度的基準を満たす名詞を摘出して標本を作成する。

（2）標本の名詞をその内容によって概念別分類をし、そのなかで「人間活動の主体」を示す語、つまり組織と身分名の使用様子を観察する。

（3）「ウリ：我々、我々の」と「ナム：他人、よそ者」の使用様子の変化を観察する

（4）固有名詞の量的・内容的特徴を比較する

3.1.1 名詞を分析対象に用いた理由と標本の名詞の性格

教科書の言語使用に現れるイデオロギーの作用を考察するにあったて、分析の対象として名詞が用いるには２つの理由がある。一つは、名詞は、言語体系の中で、社会変化に最も影響されやすい語彙論の分野に属することである。社会変化と言語の変化は不可分の関係をなしている（Meillet1926:17）。言語変化は社会の変化に適応する基本知識や新しい経験をコミュニケーションする必要によって生じるわけであるが、そのなか語彙論の側面が他の言語側面（音声論、形態論、構文論、文体論など）よりもその変化が気づかれやすい。

もう一つは、政治社会的側面で語彙を研究する時名詞はその属性上、他の語彙論の範疇（つまり形容詞､動詞､副詞）と異なる次元を持っているからである。名詞は基本的には「もの（thing）」を表し、動詞は「時間的なプロセス（process）」を表し、形容詞は「非時間的な関係（atemporal relation）」を表すものである（Lagnacker cite in 藤村 2003:29）。絶えず出現す新しいもののなかで生活する人間の言語における「もの」を表す名詞の変化は「プロセス」や「関係」を表す動詞や形容詞より早いことはいうまでもないだろう。名詞は自然物や人間活動の生産物などの「もの（thing）」を表すことだけでなく、人間の精神活動の生産物である抽象的概念をも表すのである。かくして‘自由’のような抽象的概念は名詞によって示されることで‘リンゴ’や‘メガネ’のように具体的な実体になりうる[6]。‘自由’は‘リンゴ’と全く性質の異なる指示対象物であるが、それが名詞によって示されることで、あたかもその観念が実体でもあるように言語表現のなかに用いられる。しかし‘リンゴをください’と異なって、‘自由をください’のような表現は、ある意味ではどんな意味も持たない表現である。つまりその‘自由’によって示される観念の指向が明らかでない限り、コミュニケーションを行う人同士でその名詞に対する同じ指向（référence）を共有しないかぎり意思疎通は成り立たない恐れがある。たとえば教科書のなかに‘我々は自由社会の市民である’のような陳述が顕われる時、そのなかの‘自由社会’、‘市民’などの意味は、完全にコンテクスト依存的である。そしてそのコンテクストは特定時期の特定社会の支配イデオロギーにほかならない。

かくして本論で注目されるのは、名詞が語彙範疇のなかでも最もその変化が表層的で知覚されやすい品詞であると同時にそれが人間の精神活動の生産物である抽象的概念を実体化する機能を持っている側面である。

3.1.2 語の頻度と共起

本論では、分析の焦点を名詞使用に当てるが、その際に実際の観察対象になるのは、ある程度の使用頻度を持つ名詞のみである。そして原則的に多く使用される名詞ほど、つまり高頻度に出現する名詞ほどそのことばの重要性が高いと想定する。同じように、ある名詞とある名詞が一緒に出現する頻度、つまり共起する頻度が多いほど、その結合された表現は重要な意味を持つと想

[6] バイイ（Bally）はこの類の名詞を「抽象実体詞」と呼んでいる。（バイイ 1974:30）。

定する。すなわち本論の分析は、「頻繁に行われる事象は重要である」と想定するコーパス言語学の思想 Stubbs (1996,2001) に基づく。

一般に特定社会のなかであることばや表現が頻繁に使用されると、話者は無意識的にそのことばや表現を自分の言語使用に用いるようになる (Stubbs1996)。 また頻繁に使用される言語要素やパターンは文法化になりやすい (Bybee & Hopper2001)。習慣的また半習慣的表現、つまり共起、標語、きまり文句、慣用句などは特定の形の「文化的情報」（Said cite in Stubbs ibid:169）を発信している。同時にその特定の形の「文化的情報」はまた習慣的また半習慣的表現によって伝達されつつある。ルブールは、イデオロギー的ディスクールの統計的分析は、あるイデオロギーの常套語や慣用句を表せ、「話者が知らないうちに話者のことばを決定するもの、話者の意志に関係なく話者によって話されるもの」が何かを明らかにするのに役に立つと言う（Reboul2003:49）。

教科書のなかで頻繁に出現することばや表現は、子供たちが知らないうちに彼らのことばを決定し、彼らの思考方式や世界観を特定ディスクールの秩序にあわせるように働きかけるイデオロギー的機能を持っていると考えられる。そのためこれらのことばや表現の集まりを観察することは、当該社会の支配イデオロギーの性格を究明するのに役に立つと思われる。

3.1.3　名詞の概念的分類の目的

標本の名詞は必要によって概念別分類するがその際に準拠するのは『分類語彙表』（1997 国立国語研究所資料集）である。分類語彙表は、一般にあるテキストの「表現上の特色を見る物指し」つまりそこに出現する語彙を「意味の一覧表」に当てはめてみることによって「表現の過不足や、用語の特徴的な集中」を明らかにするのに役に立つと言われる（『分類語彙表』1997:1）。

本論で語彙を概念別に分類する目的は分類の諸カテゴリーの中から最も重要であると考えられる分野の言語使用にフォーカスを当てて分析を深めるためである。既存の分類語彙標に従って名詞を分類することは、分類が主観的かつ恣意的になることを防ぐ。同時に、名詞を分類別に扱うことで個々の名詞について「ランダムに記述する不統一が生じる」（大島 1991:10）ことが避けられる。

3.2　分析資料

1970 年代に発行・使用された小学校国語教科書の全学年分 12 冊と 2000 年代の 12 冊から本文だけを抜粋して電子コーパス化した。ただし 1970 年の国語教科書の掲載されている「国旗に対する誓い」と「国民教育憲章」は当時の教育現場の実情に照らして実際の教科書のどの単元よりその反復学習率が高かったため、各学年の教科書にこれらの文書が掲載されるたびに入力した。

韓国語の名詞はその文法的特性によって、一般名詞 (ordinary noun)、依存名詞 (bound noun)、固有名詞 (proper noun) の３つの範疇に分けられる。ここで名詞の範囲に形容詞や動詞の名詞形は取り入れない。

依存名詞はその使用において制約がある特殊な名詞であり、日本語の ‘こと’、‘様’、‘枚’ など一般に文のなかで単独で表れることができない。そしてその前に修飾語をかならず必要とする。固有名詞は人の姓名や地域名のようにこの世に一個しかない名前を指し示す（ナム、コ 2001）。

標本は、1970 年の教科書と 2000 年の教科書それぞれに出現する名詞の中で、依存名詞と固有名詞を除いたすべての一般名詞（代名詞を含む）の中からその頻度が１０万文字あたり２回以上出現する相対頻度を基準にして集められた名詞群である。また各教科書で出現する固有名詞は別に集めて別の分析対象にする。以下 1970 年の教科書の名詞群の標本は「70sk」、2000 年の標本は「00sk」と標識する。またそれぞれの教科書全体を対象にする時は大文字で 1970 年の教科書は「70SK」、2000 年の教科書は「00SK」と表する。

表 1.　コーパスと標本のサイズ（括弧の中の数は延べ語数[7]）

コーパス	総文字数	総語数	名詞の数	標本（一般名詞）	固有名詞
1970 教科書（70SK）	27 万	87, 156	4499（35, 936）	961（23, 213）（標本名：sk70）	432（2150）
2000 教科書（00SK）	34 万9 千	114, 312	5477（47, 439）	1, 107（31, 569）（標本名：sk00）	361（ 910）

標本の名詞の日本語の訳は筆者によるものである。韓国語を日本語に訳すとき次のような点における了解を求める。

①対象の名詞が漢字語の場合、一般に日本語と韓国語で同じ意味で通用されるものであればそのまま漢字で訳す。例：학교（school）[hakkyo] →学校

②しかし純粋な韓国語の名詞の場合は、出来る限り似かよった日本語で訳するが、場合によって説明を付け加える。例：집 (house)[chip] →家

以下、分析の際に用いられる語、ことば、単語などの用語は特別な書き加えがないかぎり名詞を指し示す。

第 4 章　分析

4.1　組織と身分名の変化に見られる社会の変動

ここでは、各標本の人間活動の主体を示すことばの分野、つまり人間の社会生活の中心をなす組織と身分を表わすことばに焦点を当てて、この分野の名詞の使用様相を観察することを通じてそれぞれの教科書に反映されている各時期の社会的特徴を探る。

4.1.1　使用頻度の変化が顕著な組織名及び社会的身分・呼称を示す名詞

組織と身分を示す名詞の中でその出現頻度の変化が顕著な名詞には次のようなものがある。

[7] 「延べ語数」とはテキストに現れる一つ一つの単語を数え上げた総数を示し，「異なり語数」は違う単語の種類を数えた時の総数を意味する。（『応用言語学事典』：640）

表 2.　出現頻度の変化が顕著な名詞[8]

70 多	国**	民族 †	工場 †	大将**	若者 †
00 多	家族 †	子供**			

† p<.10　* p<.05　** p<.01

早くも、ここで既に「国、民族、工場、若者、将軍」が表象する‘建設と国防’とそれの「担い手—若者」といった 1970 年代の支配イデオロギーを読み取ることができる。2000 年の「子供—家族」の構図はそれの逆転であるだろう。

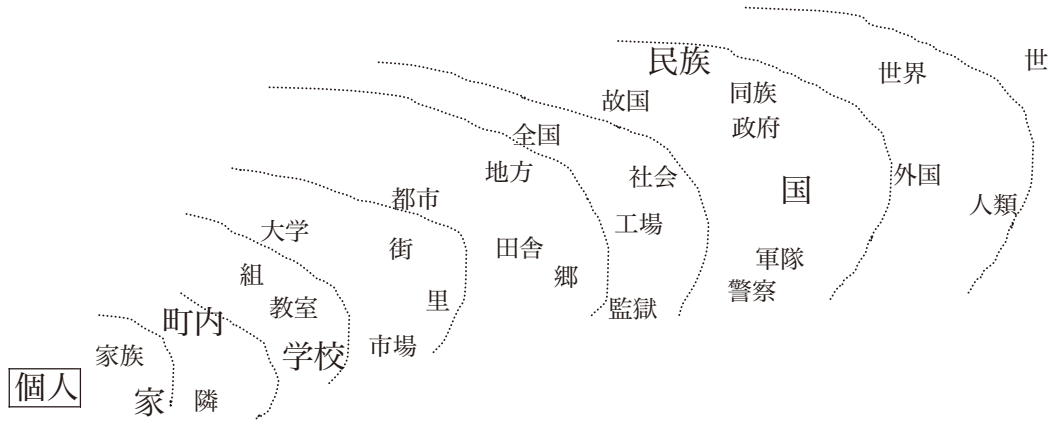
4.2　組織と身分を示すことばの使用に見られる普遍性と時期別特徴

両時期の標本の間で共通に出現する組織名と身分名（「共通語」）と片側の標本のみで出現する組織と身分名（「占有語」）を摘出する。「共通語」の名詞群を通して両時期の社会の共通性かつ普遍性を、「占有語」の名詞群を通してそれぞれの時期の社会的特徴を読み取ることを試みる。

4.2.1 「共通語」に見られる個人を囲む外部社会の普遍的な形

下の図 1 は両標本に共通に出現する組織・場所名をもとに類推した、個人を囲む外部社会の広がりの形である。両教科書の世界で、個人を囲む社会組織の有り様や外部世界の広がり様子は、大きく「個人→家族→学校→町内→民族→国→世界」の形を持っている。この組織は 1970 年代から 2000 年代にわたって変動してきた韓国社会における骨組みをなしていると考えられる。

図 1.　個人を囲む外部社会の広がり具合の典型的な形



[8] 名詞の日本語訳は，当該名詞が特に漢字語の場合はほとんどの場合日本語と類似する意味で使用される。:（例）図書館，会社。また一対一に対応する日本語がない場合は日本語で最も適切なことばで訳すか，日本語の意味を括弧のなかに加えて記す：（例）ヤンバン（官僚／有識階級），ロープ。その以外説明が必要なことばは脚注に説明を加える。

4.2.2 時期別に変化する社会の根幹組織

今からは図 1 の基本的な社会組織が各時期の政治社会的都合によって変動する様子をより詳しく探るがここではクラスター分析[9]を用いて各教科書のなかで社会組織がどのような関係をもち、またどんな組織がどのように強調されているかを観測する。下のデンドログラム（樹形図）は、両時期の教科書に共通して出現する組織や場所を示す名詞の頻度をもとにして最短距離法[10] を用いたクラスター分析を行った結果である。

図 2.　1970 年教科書の社会組織のクラスター

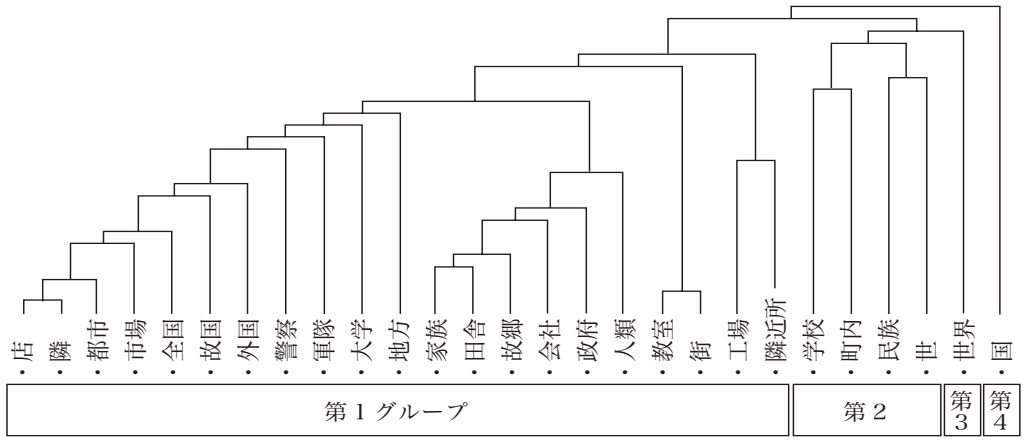
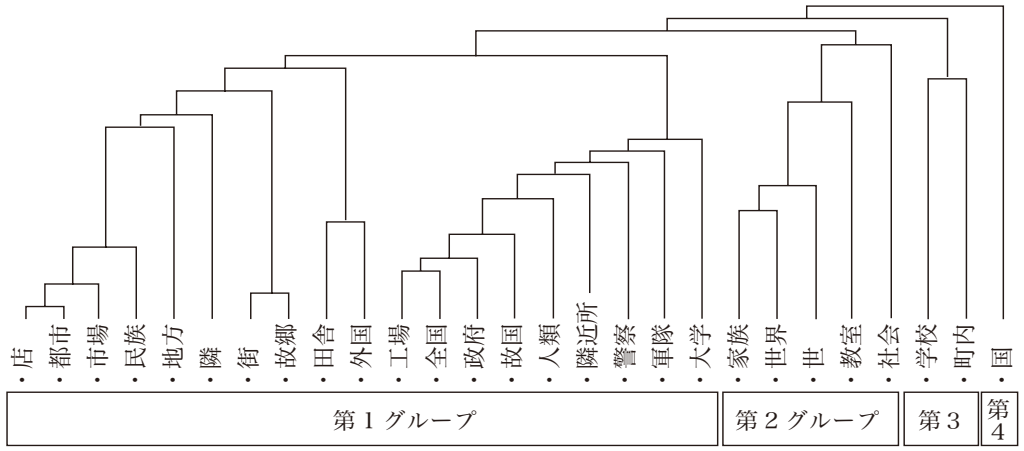


図 3.　2000 年教科書の社会組織のクラスター



[9] クラスター分析（cluster analysis）とは，異なった性質のものが混ざり合っている対象の中で，互いに似たもの同士を集めて集落（クラスター）を作り，それらを分類する方法である。つまりクラスター分析は，似ている個体，似ているクラスター（グループ）を順次まとめて次第に大きなクラスターを作ることによって個体の分類を行う手法である。（木下 1995:94）

[10] 最短距離法で 2 つのクラスターの間の非類似度は，それぞれのクラスターに含まれる対象の対のなかで，最も類似度の高い対の間の非類似度になる。この方法では，1 つでも近い対象があるクラスターはどんどん結合されていく。（木下 1995:94）

教科書の名詞使用において、ある名詞の出現頻度が高ければ高いほどそのことばの重要度が高いと考えられる。また出現頻度が同様の組織名は同じレベルの関心の対象のグループをなすという仮定のもとで、上の図から以下のようなことが読み取られる：

①両時期を横切って全体の社会組織を統制・結合するのは「国」である。

②デンドログラムを４つのグループーに分けると時期別に強調される組織が表立ってくる。

→ 1970 年代：「国」の下に「世界」と「学校、町内、民族、世」、それからその他の社会組織が一つのクラスターをなしている。

→ 2000 年代：国の下に「学校、町内」と「家族、世界、世、教室、社会」、それからその他の組織が 1 つのクラスターをなしている。

このような結果から以下の解釈がなされる。

第２と第３のグループに属する組織は「国」に統制される社会組織のなかから、少なくとも教科書世界の中では、最も表立たされる組織群であると考えられる。これらの根幹組織は各社会における際立つ外的価値であると同時に、社会の求心力をなす組織でもあると考えられる。注目すべきなのは、1970 年代にはその根幹組織の中に「民族」がおかれていたが、2000 年にはそれが「家族」と「教室」「社会」によって取って代わられていることである。つまり 1970 年代は「国」が中心になって‘外’の「世界」と関わっており、その際に‘内’の「民族、町内、学校」は「国」の直接管轄下において「世界」に向かって‘内’の第 1 線におかれるいわば社会の外的価値が付与されたのである。内的価値の個々の「家族」はいったん「民族」の下で固まってから「世界」と対面したのである。しかし 2000 年代にくると、あいかわらず「国」が重心的役割を果たすものの、1970 年代の「民族」の代わりに「家族」「教室」という個人的かつ内的価値の組織が重視されるようになる。つまり「家族」が「世界」に直接対面する外的価値として位置を整える一方「民族」は「家庭」、「故郷」のような共同体の内的価値の要因に戻されたのである。

さらに 2000 年代には、これらの根幹組織と「国」の間に「社会」が介入するようになる。「個人→民族→国→世界」のような国家・民族中心的スキームから「個人→家族→教室→学校→社会→国→世界」のように細分化されて、個々人の集まりや動きが「社会」の中に形成されてから「国」に反映されていく、いわゆる「市民社会」のスキームへの変動が読み取られると考えられる。このような社会中心組織のスキームの変化は、韓国社会が従来の国家主導型から市民主導型の社会への変動を暗示していると考えられる。

4.2.3 「占有語」に見られる時期別社会組織の内容的特徴

特定時期の支配イデオロギーが社会組織のどこに力点かつ中心点をおくのかは、その時期の人々が社会生活次いでに個人の生活に関して抱く「コモンセンス」（Fairclough1989:33）の形成に決定的な要因を果たしていると思われる。

下の表は、1970 年代の教科書と 2000 年代の教科書のそれぞれの教科書のみに現れる組織・場所の名の一覧である。

表 3. 時期別の組織・場所名

1970 年代の教科書の組織・場所	2000 年代の教科書の組織・場所
戦線、国際、戦場、放送局、新聞社、国内、国土、祖国、国家、戦争、連合軍、散兵壕、教会、お寺	図書館、博物館、隣の家、星の国、竜宮、来世、此岸、飼育場、部隊、家庭、身内、横町、病院、天国、会社

表 3 の名詞の内容を一見するだけでわれわれは両時期の組織名の‘政治的色’の違いがわかる。さらにこれら名詞群の相互関係を次のように対応させてみると当該時期の社会的秩序に従うことばの使用の変化が明らかになる。

表 3 – 1. 時期別の組織・場所名（社会組織の転位）

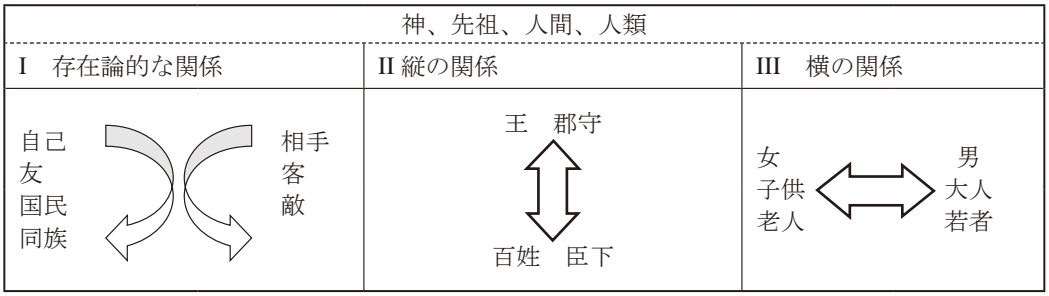
1970		2000
① 農村、国土、国内、国家、祖国、国際		家庭、身内、隣の家、横町
② 教会、お寺、放送局、新聞社	⇨	図書館、博物館、病院、会社、飼育場
③ 戦線、散兵壕、戦場、戦争、連合軍		星の国、竜宮、来世、彼岸

表 3 – 1 のように分類・対応された場所・組織名をみながら次のような解釈がなされる：
①国家中心組織から個人の空間への移行：社会組織の中心が 70 年代の国家中心的要素から個人の日常生活空間へ転位する現象が捉えられる。
②宗教的、時事的関心から市民生活の支えへの移行：政治社会的組織から市民生活を支える地域施設や職場などへ関心が移っている。
③戦闘・国防の精神から民族調への移行：70 年教科書のなかに遍在していた軍事的組織名は 2000 年の教科書から消え去り、そのかわりフォークロア的かつ幻想的で抽象的な場所が登場している。

4.2.4「共通語」に見られる身分（個人のアイデンティティ）の普遍的ありさま

両標本に共通して出現する身分および呼称名を基に下のような図式化を試みた。ここには韓国社会の底辺に潜在する人間関係の３つの基本形が設けられている。おそらくこの基本形は子供の社会化の基礎段階である小学校の国語教科書に時期を超えて持続していることで、社会的関係において韓国人が抱いている基礎的概念であると推定する。

図 4.　教科書の世界に現れる人間関係の基礎概念



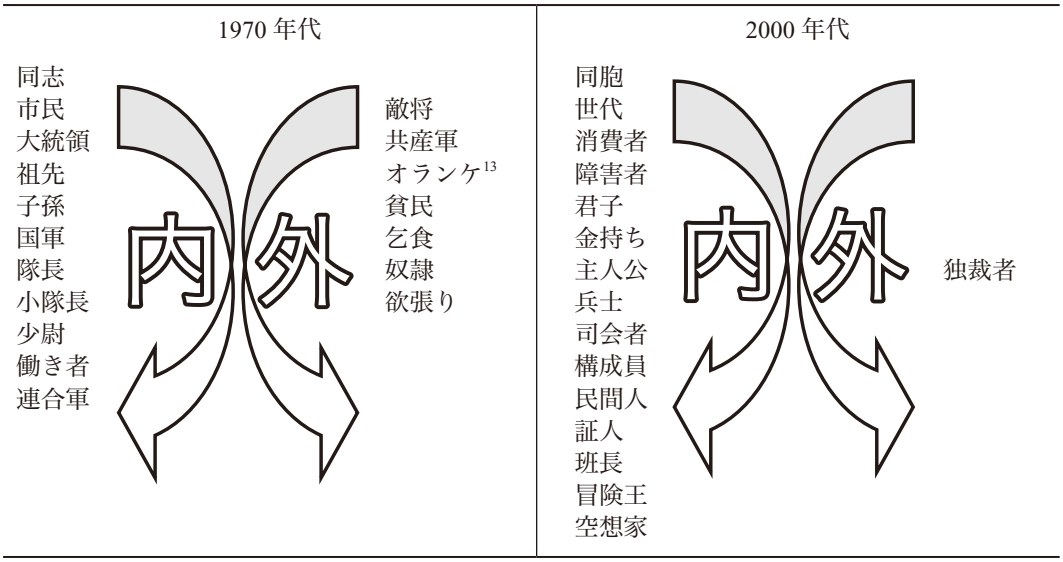
最上段の「人間」「人類」は人間関係の総体を示す。「神」「先祖」は現世の人間関係を超越した存在であるが、伝統的な儒教社会である韓国で「先祖」は「神」と同じような存在である。「II 縦の関係」は社会のなかの伝統的上下関係の、「III 横の関係」は年齢やジェンダーなどに基づいて行われる社会的分離の典型的形である。「I 存在論的関係」[11] は、教科書の中のイデオロギー的主体である‘我々’の枠内、つまり‘内’のアイデンティティと、それに対する‘よそ者’のありさまである。両時期を通じて、「キョレ（同族）」が「国民」と共に‘内’の基礎価値をなしていることは注目を値する。

4.2.5「占有語」に見られる時期別‘内’と‘外’の特徴

イデオロギーは常に‘内’の枠を定めて、その内の人間集団にアイデンティティを付着させることに努める。‘内’の枠を定める際、必然なのは‘外’、つまり‘よそ者’を導入することである。そのため特定の‘われわれ’には特定の‘よそ者’が存在する。1970 年代と 2000 年代の間で起きた支配イデオロギ–の変化は、その‘内’の枠付けの変化や‘よそ者’のありさまの変化に起因する仲間意識の変化をもたらした。以下は各標本のみに出現する（占有語）社会的身分・呼称を示す名詞をその身分･呼称に含有されている社会的または反社会的性格によって分別した‘内’と‘外’のありさまである。

[11] 筆者は教科書の言語使用の底辺に沈んでいる‘内–外’関係を浮かび上がらせるため，‘存在的関係’という人間関係のカテゴリを考案した。教科書のなかに出現する身分や呼称を示すことばには親類名や職名等社会的客観性に基づくものもあるが，「自分」，「他人」，「友」，「敵」，「国民」，「傀儡」，「消費者」，「群衆」等のような主観的かつ抽象的な関係を通して存在を確認させる身分名や呼称名もある。これらのことばが内包するのは特定集団の社会政治的状況によって成り立つ身分であり，イデオロギーの中で表象される関係を現すものである。例えば北朝鮮の教科書のなかに出現する「地主」「資本家」などは現実と関係ない，現在北朝鮮社会の‘われわれ意識’を強化するため作り上げられた虚像のよそ者でしかないのである（フレス–キム 2004）。

表 4. 時期別 ‘内’ と ‘外’[12]



両時期の ‘内’ と ‘外’ の変化をみると、イデオロギ–の変化によってディスクールの中の ‘内’ が再調整されることに伴い ‘外’ の取り替えが引き起されたことがよくわかる。70 年の ‘内–外’ の枠組みは、国家を中心とした ‘防衛と発展’ という政治的路線に基づいており、‘味方–敵’ と ‘国民–非国民’ と構造化される価値体系を作りだしている。また「働き者」か「貧民」、「乞食」かに二項対立された国民性の価値判断は、当時の社会における貧困からの脱却がどれほど切迫的であったかを物語る。同じように 70 年の ‘内’ は集団性が強く、敵の政体も明白である。また軍事関係の身分の多いことは 70 年代の韓国の社会がどれほど軍事的であったかを代弁してくれる。

反面、2000 年には 1970 年代のような ‘内–外’ の二項対立図式がもはや現れない。‘内’ のカテゴリーが年齢的、社会的要因によって多様に分化されている一方、‘外’ の姿も大きく変わっている。「共産軍」や「オランケ」などはそれ以上脅威にならない。以来警戒するべき「敵」もなくなっている。ただ一つ民主主義に反する「独裁者」だけは警戒すべきなのだ。

興味深いのは、経済発展至上主義の社会のなかで奨められた「働き者」に表象された国民像が、2000 年にくると「消費者」、「冒険王」、「空想家」などの消費・娯楽的な姿に変わるようになる。また 2000 年の ‘内’ に、「同胞」がなかま入りしたことを指摘しておきたい。

4.3 「우리ウリ（我々，われわれの）」「나ナ（私）」「남ナム（他人，外の人間）」の使用様相

「ウリナラ（われわれの国）の人々は ‘ウリ’ ということばを好んで良く使う」
「‘ウリ’ は話す人が見方の人々を称することばである」

[12] 分別の方法は，ある身分がそれが表れる文脈のなかで社会的に貢献するもの，またはその役割・活動・存在が社会的に認められるものであったら ‘内’，反対にその役割や存在が反社会的ものであったら ‘外’ とみなす。
[13] むかし満州に住んでいた女眞族の軽蔑な呼び方。(『大辞典』1982 三省出版社)

「‘ウリ’は共同体意識から出てくることばである」

以上は、韓国の 2000 年代の小学校国語教科書に提示されている「ウリ」の定義である。「ウリ」は仲間意識の極致を表すことばで韓国の国語教科書だけではなく北朝鮮、朝鮮族、在日朝鮮人の教科書を通じて最も頻度が高いことばの一つである（フレス–キム 2006 参照）。

4.3.1 「ウリ（我々）」と「ナ（私）」の使用頻度の変化

70 年代には集団的な主体「ウリ（我々、われわれの）」が、2000 年代には個別的な主体「ナ（私）」がより多く使用される。

これら２つの名詞の使用頻度の変化は、「国」と「家族」の使用変化と相関関係をなす。つまり「国」の使用頻度が「家族」より高かった 70 年代には集団的な主体「我々」が、「家族」が「国」より多く出現する 2000 年代の教科書には個別的な「私」がより多く使用されている。

表 5. 「ウリ」と「ナ」の出現頻度の差

年代	ウリ*	ナ*	国**	家族 †
70 頻度	863	1, 072	466	18
00 頻度	797	1, 777	303	82

† p<.10 * p<.05 **p<.01

両時期の間の「ウリ（我々）」と「ナ（私）」、「国」と「家族」の使用頻度は相関する。つまり 70 年代の教科書の「ウリ–国」のユニットが 2000 年の「ナ–家族」に変化している。70 年代に澎張した国家主義の支配イデオロギーは、国家的利益を優先しながら集団的国民へ働きかけてきた。一方 2000 年代のそれは、市民社会の中心的構成要素である家族の価値を訴えようとしているのである。

4.3.2 「ウリ（われわれの）」の共起現象

韓国語の代名詞「ウリ」は、場合によって名詞にかかる「われわれの」の意味と、単独に使用される「われわれ」の意味をもつが、ここでは名詞にかかる「われわれの」の意味で使用された場合だけを摘出して、「ウリ（われわれの）」と共起する名詞の様態を観察することにする。

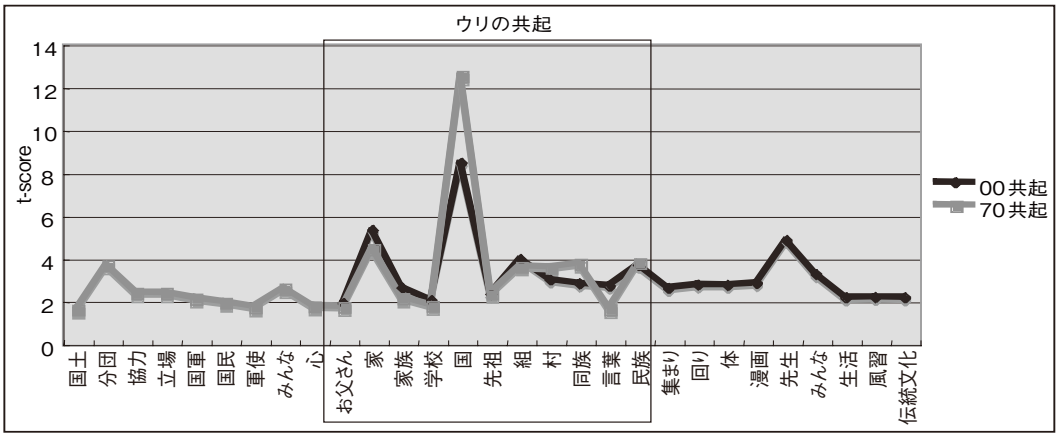
まず「ウリ（われわれの）」とある名詞が共起する時、その語の使用が内包する意味を考えてみよう。「われわれのモノ」という時、その「モノ」は「われわれ」が ‘抱き寄せる’ 対象物、つまり私を含む仲間の間で共有されるものを指し示している。ある事物が「われわれの〜」と呼ばれる途端、それはもう客観的指示物の領域を離れて、われわれに属する「私」と関係を結んでしまう。例えばある主体が ‘韓国産アニメ’、‘韓国の伝統文化’、‘韓国軍’、‘ハングル’ などを ‘われわれのアニメ’、‘われわれの伝統文化’、‘われわれの国軍’、‘われわれの文字’ と呼ぶ時、彼はみずから自分がそれを共有する集団に属していることを、意識的であれ無意識的であれ、認めることになる。同時に彼はもはやその指示対象物の客観的価値を判断する言語的機能を失っている。

その意味で両時期の教科書で「われわれの」に抱きかかえることばを探ることは、それぞれの時期の社会で最も重要視された物や事柄が何であるかを明らかにする一つの手掛かりになるはず

である。

下の図には 1970 年の教科書と 2000 年の教科書のなかで「ウリ（われわれの）」と共起する名詞のうち、その共起頻度が 1 万文字あたり 1 回以上である名詞が表されてある。

図 5. 「ウリ：われわれの」と共起することばの変化



Y 軸の数値はそれぞれの名詞の「ウリ（われわれの）」との共起の強さ、つまり「ウリ（われわれの）」との結束力の強さを表わす t スコア（『応用言語学事典』p638 参照）である。中央の四角の中には両時期を通して「ウリ」と結束力を保つ名詞、つまり両時期の教科書で共通に「ウリ」と共起する名詞が表されている。その左の部分には 1970 年代の教科書のみで「ウリ」と共起する名詞、右には 2000 年の教科書のみで「ウリ」と共起する名詞が表されている。

「ウリ」との共起度が最も強い名詞は、両時期を通して「国」である。特に 1970 年代の教科書の中でその共起強度が圧倒的で、次に強い「家」の共起強度と有意な格差が顕われる（χ 2=3.82, .01<p<.05）。

韓国人が一般的に自分の国を「ウリナラ（われわれの国）」と呼ぶことは周知の事実である。この話し方は韓国や北朝鮮だけではなく、在日や中国朝鮮族の生活共同体でも通用されている言語習慣の 1 つである（フレス−キム 2006 参照）。しかし図 5 に見られるように「ウリ」と「ナラ」の 2 つの名詞の間の共起の強度が時期別に変化していることから「ウリナラ」はイデオロギー性が強い一つの固定化した表現にすぎないことがわかる。

両時期で共通に「ウリ」と共起する語は、その共起度に時期別変化が多少見られるものの、学校関連の語を除くと、「お父さん」、「家族」、「家」、「村」、「国」、「先祖」、「同族」、「民族」、「言葉（言語）」などがある。これらの名詞が指し示す事物は、おそらく韓国社会で学校教育を通じてそれに対する連帯意識を持続的に促される、いわば共同体意識のコアをなす価値であると考えられる。

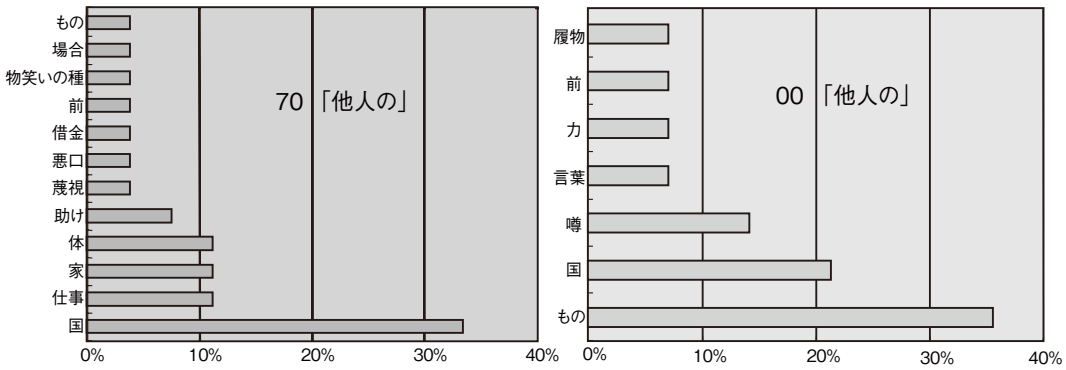
1970 年代教科書の「国土」、「国軍」、「国民」、そして「軍士（軍人）」などは 2000 年になって「ウリ」と共起しなくなり、その代わり登場するのが「われわれの漫画（アニメ）」、「われわれの風習」、「われわれの伝統文化」などの表現である。

4.3.3 「남ナム（他人，外の人間）」の使用様相

韓国語で「ウリ（我々）」と相反する概念を表わすことばに「ナム」がある。「ナム」は他人、よそ者、外の人間など、要するに仲間の枠の外に存在する人間を指し示すことばである。次はこの「ナム（他人）」の使用様相を観察することを通して、それぞれの教科書のなかでよそ者がどのように受け取られているかをみることにする。

「ナムイ（他人の）」の共起具合を見ると，下の図６に見られるように、70 年代には「他人の国」のパターンが最も多く（33%）発生している。一方 2000 年は「他人の物」という形で最も多く使用されている (36%)。

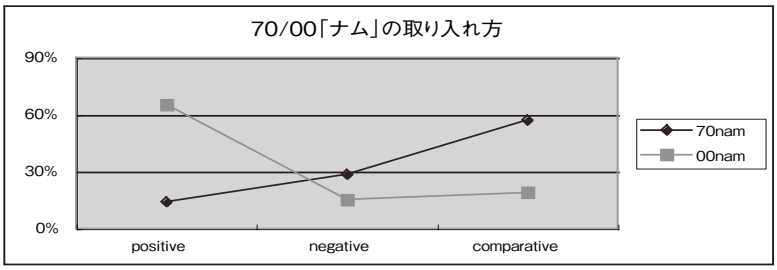
図 6. 「他人」と共起することば



1970 年代の「国家権威主義」のイデオロギ–は、「われわれ」と「国民」という集団の一員としての自己覚醒を呼び起こすように努めた。したがって‘よそ者’もまずは国家単位の集団で認識させようと働きかけるのは当然のプロセスである。一方 2000 年になると上の表５に見られるように、「ウリ（われわれ）」より「ナ（私）」がより多く使用されるようになる。同時に「ナム（他人）」が「物」の所有者としての個々人を指すことがより頻繁になった。つまりここにも各時期の支配イデオロギ–に基づくいわば「同一秩序のデイスクール」（Foucault1969:44）が持続しているのである。

次は各々の教科書で‘よそ者’がどのように扱われているかをみる。そのため次のような方法を使った。まず「ナム（他人，よそ者）」が言及された全ての文を抜粋して、文の中で「われわれ」が「ナム」に対して表している態度を、肯定的、否定的、競争的の３つのカテゴリーに分けた。例えば「いくら貧しい里でも勤勉に働きながら他人に頼らずにみずから‥」（1970 小学５年）のような文で‘他人に頼る’ことは否定的意味を持っている。それに対して「他人の気持ちを配慮する‥（2000 小学 4 年）」の文で‘他人を配慮する’ことは肯定的意味を持つ。一方「勉強は他人に劣らない‥」（2000 小学 5 年）のような文の中で「他人」は競争の対象になっていると判断される。

図 7.　他人の取り入れ態度の変化



1970 年代と 2000 年代の主体の他人に対する態度の間には大きな変化が見える。図 7 に見られるように 70 年代の主体は他人に対して否定的で警戒心かつ競争心に燃えていたが 2000 年代は‘よそ者’ をより好意的で柔らかい態度で受け入れていることがわかる。

4.4　固有名詞の使用に見られる年代別特徴

ここまででみたように、一般名詞の使用に見られる言語使用の様々な側面は結局のところ言語使用の内面に作用する支配イデオロギーの働きの結果である。そこにはことばの過剰・過小使用、代替、出現と消却などの現象がみえる。

教科書の中での国名、地名、人名、歴史的事実、伝統的事柄、特産物の名を示す固有名詞の使用は、特定時期の特定共同体のなかで、いわゆる‘教育的目的’に応じて選別・採択・再解釈された歴史、人物などを提示する。以下では各教科書のなかの“選別”された伝統の選択・解釈の様子を比較する。

4.4.1　両時期の教科書の固有名詞の内容的分布

まず各教科書に出現する全ての固有名詞を摘出してその内容によって分類し、各分類に属する名詞の数とその延べ語数を表する。分類方法は、固有名詞をその内容によって、＜国内＞と＜国外＞に分ける。その下に＜国内＞の地域名、都市名、山や川の名は＜地名＞に、そして＜国内＞の＜人物＞の中、実存の人物は＜歴史＞に、また伝承民話の登場人物名は＜民話＞に分類する。その他「新羅」「慶福宮」「ゴヌ」等、歴史的国名や建築名また伝統的遊び名などは＜国産＞に分類した。一方＜国外＞は外国の＜国名・地域名＞と＜人物＞そして「ピラミッド」「サンタクロース」「カナ（仮名）」のような外国の文化的産物などは＜外国産＞と処理する。

表 6.　各教科書の中の固有名詞の分布

	国　内				計	国　外			計	総計
	地名	人物 歴史	人物 民話	国産		国･地域名	人物	外国産		
1970年	105（321）	35（243）	7（138）	57（267）	204（969）	107（449）	46（307）	28（192）	181（948）	385（1917）
相対値	12（37）	4（28）	1（16）	7（31）	24（111）	12（52）	5（35）	3（22）	20（109）	44（220）
2000年	63（310）	52（255）	12（222）	61（322）	188（1109）	77（338）	21（88）	20（117）	118（543）	306（1652）
相対値	6（27）	5（22）	1（19）	5（28）	16（28）	7（30）	2（8）	2（10）	11（48）	27（145）

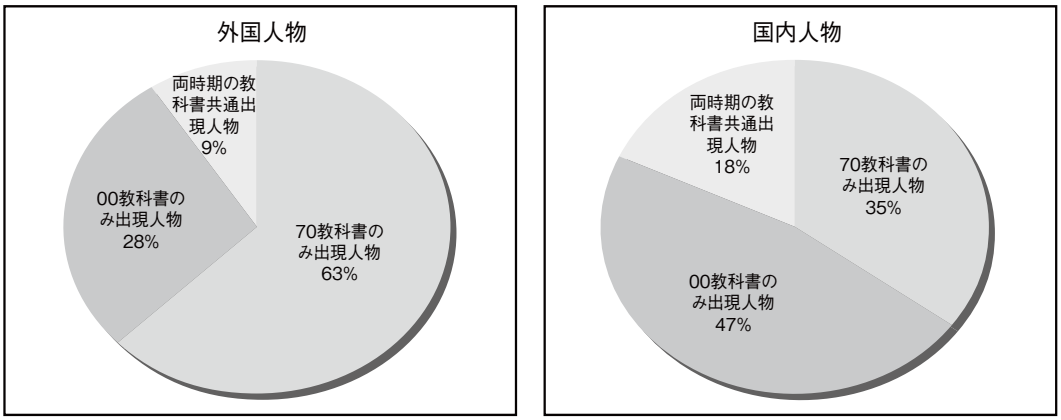
註 1：相対値は 1 万文字当たりの相対頻度　註 2：（　）の中は延べ語数

表６を基に両時期の教科書の固有名詞の使用の全体的傾向を比べると以下のことが言える：
① 1970 年の教科書には 2000 年より固有名詞が異なり語数（$\chi^2(1)=4.07, .01<p<.05$）も使用頻度（延べ語数）（$\chi^2(1)=15, p<.01$）も多い。
② 1970 年の教科書には国内の事柄を示す固有名詞が、語彙数も使用頻度も、国外に関わる固有名詞より少々多いものの有意な格差は見えない。反面、2000 年の教科書の固有名詞には国内に関するものが国外のそれより圧倒的に多い（$p<.01$）。特に 1970 年の教科書に比べて 2000 年の外国の人物名が激減している。
③全体的にみると、国内に関わる固有名詞の使用においては、名詞の種類もその使用頻度も両時期の教科書の間で比較的等しいが、国外に関わる固有名詞の出現においては、語彙数も使用頻度も両時期の間で有意な格差（$p<.01$）が見られ、2000 年の教科書では 1970 年に比べて外国の人物や文化的産物を言及する場面が大きく減少している。

4.4.2　教科書の中の偉人

教科書に出現する実存人名は大部分の場合、当該社会が規範とする理想的人物としてみなして選択された偉人が多い。図８は両時期の教科書に出現する国内・外の実存人物のなか、両教科書に共通で出現する人物の数と各教科書のみに出現する人物の数の割合を表したものである。

図 8.　両時期の教科書の間の偉人の共有度



1970 年の教科書と 2000 年の教科書の間で共通に出現する偉人或は規範となる人物は外国人物９％、国内人物 18％でしかない。このように時期別に提示される偉人に大きな変化がみえるのは、それぞれの時期の公教育における価値選択に大きな変化があることを示す。

両時期を通じて教科書のなかに高頻度で出現する国内の人物、いわば民族的偉人は、ハングルの創製に中心役割を果たした朝鮮時代の王、「セジョン世宗」、同じ朝鮮時代の任辰倭乱[14] の時日

14　豊臣秀吉による文禄の役の朝鮮側からの呼称（『大辞林』三省堂）

本軍を退けた「リ・スンシン李舜臣」将軍、植民地時代日本の伊藤博文を暗殺した独立運動家「アン・ジュングン」がいる。一方両時期共通で高頻度に出現する外国人名はフランスの昆虫学者「ファーブル (H.Favre)」である。

また教科書の人物の社会的身分及び主要活動は、主に歴代の＜王＞、＜将軍＞、＜学者＞、そして＜独立運動家＞に分けられる。その他に建国神話に登場する人物、芸術家や名僧などがいる。1970 年の教科書には将軍の名がより多く言及されている。反面 2000 年には将軍名は激減している一方、学者名が多くなる。1970 年の教科書には、当時社会の主要な関心事の一つであった国家復興のイデオロギーに合わせて、開拓や探検、科学発明の分野におけるの人物が数多く紹介されているが、2000 年の教科書では外国人名の出現が減っていると同時に、これら人物の政体も政治的人物(ガンジー)から娯楽関係の人物(ディズニー)まで多様化している。教科書のスーパースターも入れ替わり 1970 年の教科書に最も多く言及された人物名は新羅時代（677 ～ 935）に国のために命を抛った少年武士「カンチャン」であったが、2000 年の教科書のそれは平和的民族指導者「マハトマ・ガンジー」である。

従来の韓国の教科書のなかに「祖国の防衛と繁栄のため赫々たる功績を立てた『李舜臣』などの英雄的軍人たち」が多く提示されるなど「『軍事主義文化』が学校教育の中に強く内在」（ノ 1988:67）していたことは既に指摘されている。2000 年の教科書の中に「カンジー」の名が従来の教科書で選定されていた国内のどの偉人より数多く登場していることは、公教育における偉人像の変化を意味しており、同時にそれは好戦的気相より平和主義的価値を次世代に教えようとする価値選択の変化をも表している。価値選択の変化は独立運動家の選択にも同様であり、1970 年の教科書に登場する独立運動家の活動が暴力的抗日運動であるのに対して、2000 年代には非暴力・平和的抵抗運動を尽くした人物達が多く選ばれている。また 2000 年の教科書には 70 年代にはほとんど看過されていた建国神話の人物名が登場していることに注目すべきである。

4.4.3 教科書の中の外国

表 6 に見られるように、1970 年の教科書は 2000 年代に比べて出現する外国の地名・地域名が多く、その使用頻度も多い。ことばの量から考えると 1970 年の教科書では 2000 年より外国に対する関心が高かったともいえるが、次にその内容をより詳しくみることにする。

4.4.3.1 外国・地域名の出現傾向の比較

各教科書のなかで出現する外国名、外国の地名、地域名[15] とその出現頻度の順位は次の図のとおりである。

15 各教科書の語彙量にあわせた最小頻度（1970：6 回，2000：7 回）以上に出現する外国名，外国の地名，地域名を対象にした。ただし 1970 年の教科書のなか，北朝鮮（5 回）は基準を満たさなかったが比較のために対象に入れた。

図 9.　1970 年代の教科書の国・地域名の出現傾向

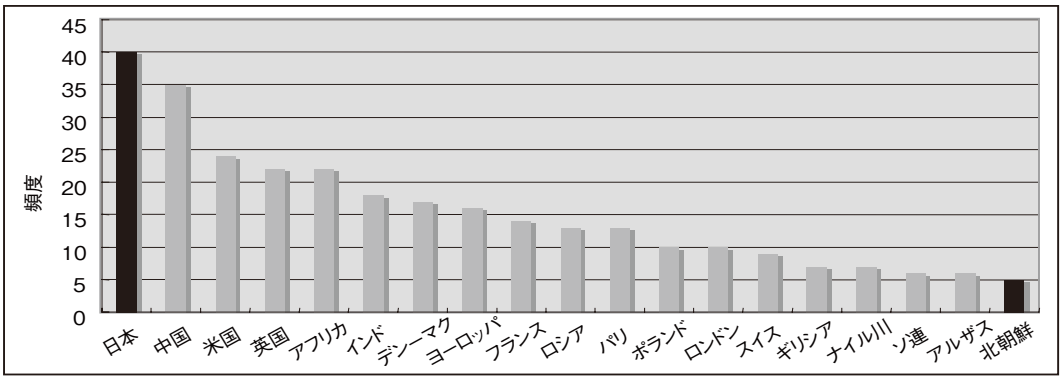
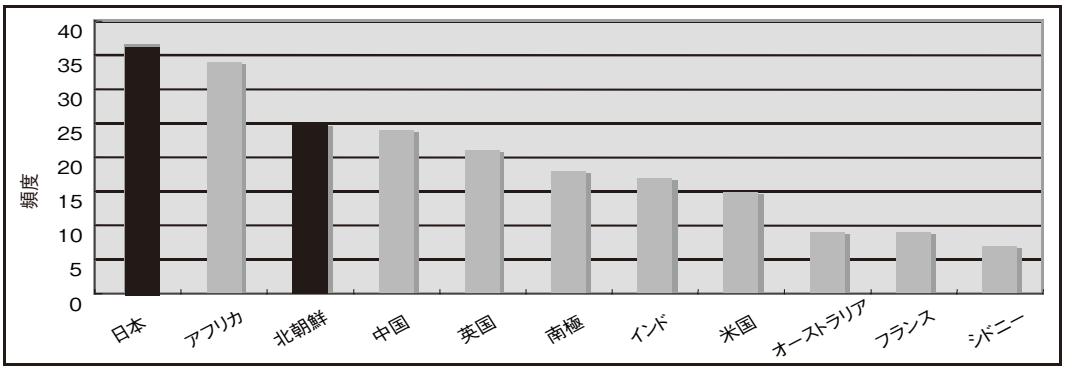


図 10.　2000 年の教科書の国・地域名の出現傾向



ここで注目しておきたいのは、2000 年になって教科書のなかに「北朝鮮」の出現が多くなったことと、「日本」は両時期を通じて最も多く出現する外国名であることである。それについては次でより詳しく検討することにする。

4.4.3.2　教科書の中の外国・地域のイメージ

各時期の教科書に頻繁に出現する外国名・地域名のなかで、日本，中国、アフリカ、米国、フランスの５つの国・地域名がどのようなイメージで現れているかをみるために、特定の外国名と共起する語彙の概念の分類カテゴリーと国名に対する対応分析を用いた。方法は教科書のなかで、ある外国名が出現するたびその文を集め、それらの文から名詞を摘出して、各名詞をその内容によって５つの概念別に分類する。概念別分類は抽象的概念を表す名詞（カテゴリー I)、人間活動の主体を表す名詞（カテゴリー II)、人間活動そのものを表す名詞（カテゴリー III)、生産物及び道具名（カテゴリー IV）そして自然物や自然的現象を表す名詞（カテゴリー V）に分類する。各分類カテゴリーの名詞の数を度数に、５つの国名・地域名と５つの概念別分類カテゴリーによる対応分析の結果は下の図に表される。

図 11．70 年代の 4 つの国及びアフリカのイメージ

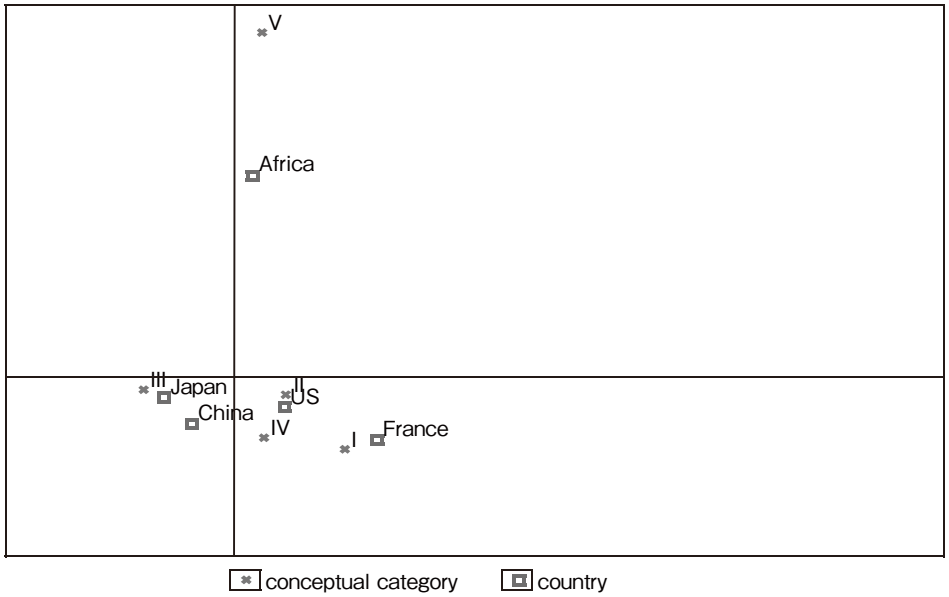
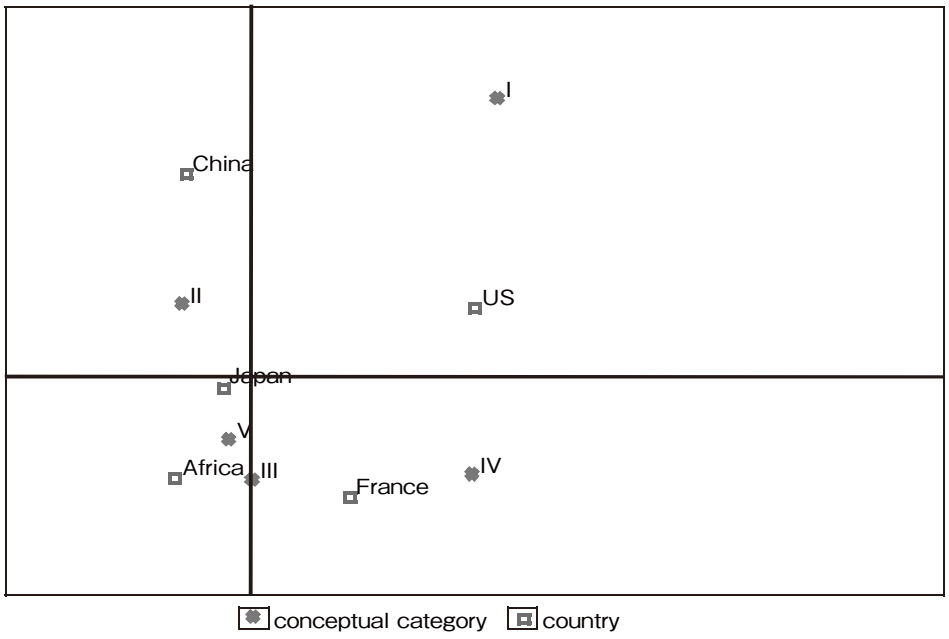


図 12．00 年代の 4 つの国及びアフリカのイメージ



上の図には５つの国・地域名と概念別分類の５つの分野が同時に配置されている。配置の仕方は、特定国・地域名と共起する名詞の中で、あるカテゴリーに属する名詞が多ければ多いほどそ

の特定国・地域の名はカテゴリーの名の付近に位置する。同時に、カテゴリーごとに与えられた名詞の分配具合が似ている国・地域名は近くに位置する。

この分析を通じて各時期の教科書の中で、特定の国がどのような概念で、どの程度頻繁に言及されているか、つまりそれぞれの時期の教科書に描かれている外国のイメージとその国への関心度を類推することができる。

上の２つの図から次のことがいえる：

①各々の時期によってそれぞれの国の関心度やイメージが異なっているが、日本に対する関心度だけは持続的である。

②アフリカへの関心が高まっている：1970 年代には日本、中国、米国などの関心が高く、これらの国は組織や場所、人々また生産物などと一緒に言及されていた。2000 年代にはアフリカへの関心が高くなっている。しかし自然的概念のカテゴリー（V）とアフリカが常に一緒に動いていることから、アフリカが言及される時に主に触れる事柄は自然に関することであることが分かる。「アフリカ–自然」というイメージは両時期の教科書で共通に表れる。しかし内容をみると、アフリカのイメージが変わっていくことも事実である。教科書の 2000 年のアフリカの対するイメージは 1970 年代の教科書に見られるような暗黒・未開の象徴から逃れた。さらに「アフリカ–自然」だけではなく「アフリカ–人間活動」、つまり人々の生活の場でもあるアフリカをアーピルするようになる。アフリカは人間の暖かさが未だに生きている地域的特性が富んだ異文化コミュニケーションの対象へと変貌している。一見するとアフリカのイメージは非常に進んでいるようにみえる。しかし一方では、アフリカは依然として特別な存在として扱われている。何よりもアフリカが一つの国や一つの民族共同体であるかのように大雑把に認識している癖は 30 年に渡って持続している。このような知識はまさに「調整された知識システム」(Apple & Christian-Smith 1991:4) の一部であり、これらの知識システムは現実と離れた、または現実と関係がないイデオロギー的（現実の）再認でしかない。

結局、教科書の知識は時間と共に進化（evolution）するものでなく、ただ転動 (mutation) しているだけのように見える。つまりその時の支配イデオロギーによって、適切に変形された必要な分だけの知識が、教科書の内に盛り上げられているのである。

4.4.3.3　教科書の中の北朝鮮

図 9 と図 10 に見られるように 1970 年代に比べて 2000 年の小学校の国語教科書のなかには、北朝鮮に対する言及が非常に多くなっている。またその内容も大きく変化している。

1970 年代の教科書で「北朝鮮」は 5 回出現し、そのなか、4 回が「共産軍」、または「傀儡軍」と共起している。つまり当時の韓国にとっての北朝鮮は共産主義と規定されていて、朝鮮戦争を起こした明らかに敵対的な「よそ者」であった。

北朝鮮の共産軍の思いがけない侵略によって 6.25 事変が起ってわずか数日のあいだにソウルは踏みつけられました。（1970 小学 5 年）

さらに北朝鮮は以下のように反民族的集団のようにまで扱われている：

我々が 8.15 解放を迎えることができたのも、大韓民国を新しく興せることができたのも、また 6.25 事変の侵略において国連と一緒に北朝鮮の傀儡軍を打ち破ることができたことも、全て三一精神がもたらした結果である。（1970 小学 6 年）

ここで言及された「三一精神」とは、1919 年 3 月 1 日日本の植民地統治に抗して起き上がった民衆運動に有来する、朝鮮民族の抗日精神の象徴である。つまり、「三一精神」は、韓国人が誇るべき、他民族の支配に不服・抗する韓国人の民族精神の象徴である。「三一精神」が北朝鮮に対して用いられたことは、事実上北朝鮮を同族ではない他民族集団の扱いをしたことを意味する。

しかし 2000 年の教科書のなかの北朝鮮に対するディスクールは凄まじく変わっている：

我々は、言語を意思疎通の手段かつ思考の土台とみなしているが、北朝鮮では言語を共産主義の革命と建設の力強い武器として考え、住民の統制の手段としてみなしている。（2000 小学 6 年）

ここで北朝鮮–共産主義は、敵国–敵対イデオロギーとしてみなされるより、異なる政治イデオロギーとそれをもつ国として比較的中立な視線で論じられている。

さらに北朝鮮は、往来（可能）の国、また助けが必要な同胞集団、さらに韓国に比べてより効果的な言語政策を行い国語保存に力を尽くす国としてイメージアップされている：

…例えば、北朝鮮に住んだが最近われわれの国に来た人々の言葉を聞くと‘rodon’,‘ryangsik’,‘nyemwen’,‘nyeja’などのように発音することがわかる。（2000 小学 6 年）

また、経済的に困難に直面した北朝鮮同胞たちを助けるために北朝鮮に対する技術投資などを果敢に実現させなければならない。（2000 小学 6 年）

実際 2000 年の教科書のなかの北朝鮮に対する話の 80％は言語異質化に関するものであり、残りは経済的苦難に陥った同族の助け合いを訴えている。つまり北朝鮮はもはや脅威的な相手ではなく、共存の相手、助けてあげなければならない同じ民族に変わっているのである。

このように 2000 年代の教科書のなかには、北朝鮮に対する言及が大きく増加し、その内容も友好的になっていて、1970 年代の教科書と比べて、北朝鮮に対する態度が転倒している。要するに新政権の対北政策、いわゆる「太陽政策」が直ちに学校教育に反映されているのである。

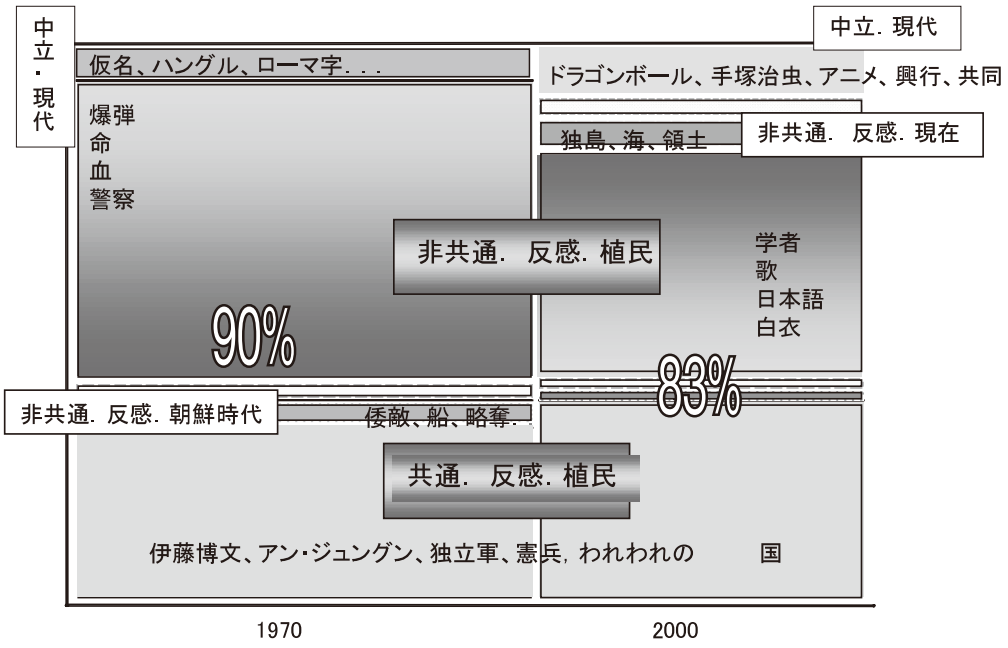
4.4.3.4　教科書の中の日本

既にみたように北朝鮮を始め、外国や地域名の出現様相やそのイメージは、時期別変化がみら

れるものの、日本は常に注目の的になっているようにみえる。教科書のなかに日本はどのように描かれているのかを見るために以下のような分析を行った

「日本」が出現する文の中の名詞を全て摘出して、個々の名詞を、１）両時期に共通して出現する「共通語」と特定の時期のみに出現する「非共通語」に分け、２）名詞の出現する文脈を基に日本に対する感情が反感的か、好感的かまたは中立的か、３）歴史的状況によって植民地前、植民地時代、現代に分類する。例えば、「この音は、青年ユン・ボンギルが日本の侵略者に投げた爆弾が爆発する音であった」（1970 小学 5 年）のような文のなかの「爆弾」は 1970 年の教科書にのみ「日本」と共起するので「非共通語」、そして文脈における対日感情が良くないので「反感」、また物語の歴史的舞台が植民地の時期であるから「植民」になる。そうすると「爆弾」は非共通．反感．植民のように分類される。共通可不と対日感情及び時代の３つのカテゴリーと各カテゴリーの名詞の量を基に分割分析を行った結果、次のモザイク図 13 が作られた。各セルの面積は名詞の量に比例する。各セルには、そのセルに相当するいくつかの名詞を記した[16]。全体的名詞の量は 1970 年の方が 2000 年より多い。

図 13．小学校国語教科書で見られる対日感情



日本と共起する名詞の中、両時期の教科書に共通する名詞の内容はほとんど植民地時代の非圧迫者としての記憶を訴えている。しかし非共通語には植民地の記憶の陳述の方法の相違が現れる。1970 年の教科書には‘殺身成仁’つまり自己犠牲的で、戦闘的な抗日の逸話が多い。しかし

16　図 13 の 2000 年の教科書の非共通．反感．植民の部分の「白衣」は白い服の意味。韓国人は伝統的に白い服を好んできるということでみずからを‘白衣の民族’と呼ぶ時もある。

2000 年にはその抵抗モードがより平和的な出来事（例えば示威運動など）が選ばれている

30 歳になった時、大韓義軍参謀中将また特派独立大将の肩書きをもって、祖国を侵略する日本に対抗して命をかけて戦うことを決心した。。（1970 小学 5 年）

30 歳になった時、大韓義軍参謀中将また特派独立大将の肩書きをもって、祖国を侵略する日本に対抗して命をかけて戦うことを決心した。（1970 小学 6 年）

しかし 2000 の教科書には、抵抗モードが替えられ、より平和的示威運動の記憶が語られている。

日本はわれわれの民族が白衣を好んで着ることを誹った。（2000 小学 6 年）

ちょうどその歌を学校の児童が思わず歌っていることを聞いた日本の巡査が学校を草の根を分けて探した。（2000 小学 5 年）

しかしどうしてわれわれの国の領土である独島を、日本は自分の領土だというのか気になる。（2000 小学 6 年）

また 1970 年の教科書では反日･抗日の記憶が朝鮮時代（例えば任辰倭乱（1592 〜 1598）の時期）にまでさかのぼる。2000 年の教科書には植民値時代以前のことは触られていないが、その代わり現在直面している独島（竹島）をめぐる領土問題が問題になっている。中立的な視線で日本を扱う場面には 2000 年の教科書の中にワールドカップの韓日共同開催や日本のアニメ産業に対する経済的競争意識を励ます内容などがあるが、その量は全体の 10％に満たない。また 1970 年の教科書の場合は 7％弱である。ことばの量から判断すると、結局、教科書のなかで日本が言及される際、1970 年の教科書ではその内容の 90％が、2000 年の教科書では 83％が日本に対して反感を示しているのである。

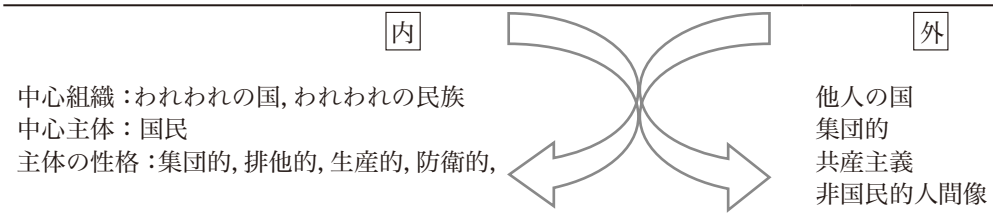
第 5 章　考察

1970 年と 2000 年の小学校国語教科書の言語使用を比較分析した結果、以下の 4 つの点に関する考察がなされる。

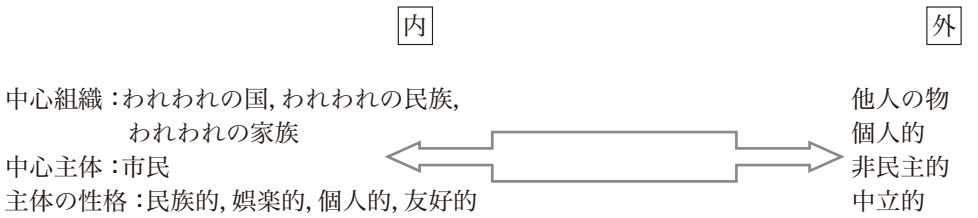
(1) イデオロギーは常に「内–外」の枠を定めてよそ者に対する ‘われわれ’ 意識を作り上げながら内の人間集団にアイデンティティを固着させることに努める。

韓国の 1970 年と 2000 年の国語教科書に見られる ‘内’ と ‘外’ の関係は次のように整理できる。

1970 年代の教科書



2000 年代の教科書



1970 年代の支配イデオロギーはその中心が「国家」におかれているため‘内’と‘外’関係も国家次元で捉えられており、主体のアイデンティティにおいて‘反共産主義の生産的国民性’が強調される。一方 2000 年のイデオロギーの中心は「家族」におかれているように見える。そのため「内–外」関係もより中立的であり同時に個人的である。しかしいずれにしても両時期の主体のアイデンティティの底辺に流れているのは、「国」と「民族」の観念であり、特に 2000 年代には「伝統文化」や「固有風習」そして民族的偉人を強調しながら民族意識を高めようとする傾向が目立つ。

⑵支配イデオロギーの変化に伴う‘内’と‘外’の枠の再調整は教科書の言語使用に変化をもたらす。

—出現頻度の変化：70 年代に高頻度で出現していた「国」、「工場」、「将軍」等のことばは 2000 年代にはその使用頻度が減っていき、その代わりに「家族」、「子供」などの名詞が高頻度に出現している。

—語の消失と出現：反共主義に基づく政治的、戦闘的ことばは去っていった。こうして「戦線」、「国軍」、「共産軍」などの名詞は、2000 年の教科書には影を隠しており、代わりに「判事」、「証人」などの民主的な名詞、また「伝統文化」「アニメ」などのフォークロア的、娯楽的ことばが登場する。70 年代に禁忌語であった「独裁者」が、2000 年の教科書に非民主的かつ非社会的な「よそ者」として現れるようになったのは特記するべき事項であろう。

—言語の意味の転位、変化、発生：両時期を渡って持続する「ウリ（われわれの）」と「国」の間の強い共起度がもたらすイデオロギー的効果は次のように推論できる：「ウリナラ」つまり「われわれの国」を一つの決まり文句にすることで、①‘われわれ’意識を既に常に「国」に連累させる。②指示対象である「国」、つまり韓国に対して自問する余地をなくす。このような言語のイデオロギー的作用は、「ウリ」と「国」のそれぞれのことばの元の意味を転位させる。2000 年代の「ウ

リアニメ」のような表現も同じく、「ウリアニメ」と「韓国産アニメ」は指示物、つまり外示的意味は同じであるとしても、それぞれの含有する意味、つまり共示的意味（connotation）は異なっている。また「ナム（他人）」の取り扱いの変化：「ナム（他人）」の使用が常に否定的で警戒的な意味を随伴する時（1970 年代）と、その反対に今度はそれが友好的な意味で使用される時（2000 年代）、それぞれの「ナム」が持つことばの意味合いは異なっている。これはことばの意味の変化や新しい意味の発生、消滅のプロセスに深く関与しているイデオロギー的操作の一つの例であると言えるだろう。

(3)「植民地の経験」、「分断体制」、「近代化」の問題に対するディスクールの変化

1970 年代の教科書では、植民地の経験と分断国家の状況が、国家防衛と経済発展に基づく国家主義イデオロギー確立に利用されている。つまり反日感情、反共主義および脱貧困の意志は、国家中心の国民団結を訴える理念的根拠を与え、現状の統制社会の秩序を当然のように描いたのである。そのため、「ウリナラ（われわれの国）」を支える「国民」という集団的主体が教科書のなかに確立され、国家防衛と経済発展のため自己犠牲的愛国者の‘われわれ’が奨められている。同様に、よそ者の姿も明らかであり、それは「共産主義」、「乞食」、「奴隷」などで表される。

一方、2000 年の教科書では、反共主義、経済発展至上主義イデオロギーは姿を消した。それはもはや北朝鮮と反共主義は、支配イデオロギーを正当化する要因にはなれないためである。経済大国の仲間入りに成功した今になって、「働き者」の主体の姿は「消費者」に取って代わられた。この時期にくると反民主主義的「独裁者」がよそ者に現れる

つまり 1970 年と 2000 年の教科書の間で、「分断体制」に関わるディスクールは、反共イデオロギーから統一イデオロギーへ移行し、「近代化」の問題は経済発展至上主義から国際競争力を論議するまでシフトアップした。

「植民地の経験」も 1970 年の戦闘的、自己犠牲的抗拒行為と異なり 2000 年には、平和的示威運動の逸話など、より穏健な語り方を通じて伝達されるようになっている。しかし、その語り方つまり表面的ディスクールは変化したものの、日本に対する反感は 30 年をわたって持続しており、「植民地の経験」はいずれも民族主義イデオロギーの産出における源をなしていると考えられる。

(4)教科書デイスクールはそれ自体一つの全体性をなす（それはイデオロギー的デイスクールの典型的な構造である）。

イデオロギー的思考はその独特な論争法に頼って、人々の思考を経験的現実から解放させ、公理に支えられた「前提から演繹していく論証のプロセス」に従わせる。そして一旦その前提または出発点が確定すると、イデオロギー的思考はいかなる経験からも、いかなる現実からも影響や教訓を受け付けないまま一貫性をもってつき進む。（Arendt1972:219-220）。教科書ディスクールもその「前提から演繹している論証のプロセス」に従った「一貫性」を持っている。つまり教科書の中の全ての陳述は支配イデオロギーの原理に従って秩序整然に発されているのである。例えば 1970 年代の韓国の社会の反共・建設・国防の支配イデオロギーは教科書のディスクールの前

提となり、主体のアイデンティティを限定し（反共産的・防衛的集団)、参照される歴史的事実や人物（国家防衛の将軍や開拓の英雄)、また客観的事実（例えばアフリカの存在）までも、既にディスクールの秩序に従って選択され、適切に変形された形でイデオロギーの正当性を立証するため動員される。そのため教科書ディスクールはそれ自体で全てが説明されて立証できる「Intra-textuel（内部参照)」として機能する。つまり提起された問題に対する答えがテキストの内で発見できる、テキスト自体が自分の自給辞書にも機能する構造の反復 (Harris cite in Pêcheux 1975:56) が教科書デイスクールの構造的本質であると考えられる。

結論

学校教育は、当該社会における既存の権力構造や生産関係に基づく社会秩序の再生産に寄与する国家イデオロギー装置である。そして教科書ディスクールは、子供たちに特定時期の支配イデオロギーに適合する政治・社会的アイデンティティを形成させるために、経験的現実と離れて、イデオロギー的公理に従って秩序化されている。そのため教科書のなかの全ての陳述は、それらの間で相互参照的、つまりある陳述の正当性が他の陳述を通して立証できるように構成されている。したがって学校の教科書はそれ自体支配イデオロギー的ディスクールの総体、つまり‘可能な思考のイデオロギー的小宇宙’である。

1970 年代の韓国の教科書は国家至上主義や反共主義などに基づく国家発展、防衛という理念的中心によって整序されたディスクールである。当時の状況、つまり国作りと国家防衛においての切迫性が支配イデオロギーに強く反影されている。そのため 1970 年の支配イデオロギー（反共主義に基づく国家至上主義）は透明で一律的かつ閉鎖的である。それはある意味で現在の北朝鮮の教科書に見られるイデオロギー的操作（フレス - キム 2004 参照）に劣らず強圧的な面を持っている。

2000 年の教科書デイスクールは 1970 年代の支配イデオロギーの反ディスクールとして立ち向かっている。つまり反共主義・経済発展至上主義・国家権威主義、集団主義の 70 年代のイデオロギ–に対立する個人主義、民主主義，娯楽主義を標榜しながら 70 年代と遥かに異なる解放社会の側面を映し出しているのである。また「国家主義」から「民族主義」へと政治理念が転移するなかで、家族中心の個人主義が強調されているように見えるが、一方では「伝統文化」「同胞」を持ち出して大衆を「ウリ」へと呼び寄せようとする民族主義イデオロギーが働いている。同様に反共イデオロギーが統一イデオロギーへ移行し、経済発展至上主義が市民生活の質の問題にシフトするなかで、「植民地の経験」は 2000 年の教科書でも根強く語られながら民族主義イデオロギーの産出に作用する。2000 年代教科書のイデオロギーは個人主義と民族主義の間で揺れ動いているように見える。

参考文献

アプル , M. (M. Apple). 1986.『学校幻想とカリキュラム』日本エディタースクール出版部.

アルチュセール , L. (L.Althusser). 1965.『マルクスのために』（河野健二／田村俶／西川長夫訳）平凡社、1994.

アルチュセール , L. (L.Althusser). 1970.「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」『アルチュセールの＜イデオロギー＞論』（柳内隆訳 ）三交社、1993.

イーグルトン , T. (T.Eagleton). 1999.『イデオロギーは何か』（大橋訳）平凡社.

石部尚登. 2005.「コーパス言語学と批判的談話分析：沈黙の５年間が開けて」『JAECSNewsLetter51』英語コーパス学会.

今村仁司. 1997.『アルチュセール —認識論的切断』講談社.

大島資生. 1991.「名詞の統語的･意味的分類の試みーいわゆる「同格連体名詞」について」『計量国語学』、18（1）、9-25.

木下栄蔵. 1995.『多変量解析入門』近代科学社.

国立国語研究所. 1997.『分類語彙表』国立国語研究所資料集６.

バイイ , C. (C.Bally). 1974.『言語活動と生活』（小林英夫訳）岩波書店.

藤村逸子. 2003.「色彩名詞と色彩形容詞の対立—新聞と文学のコーパスからわかることー」『日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用による

コロケーション研究中間報告論文集』25-48.

プラムナッツ , JP. (JP.Plamenatz). 1972.『イデオロギー』（田中治男訳）福村出版.

フレス - キム・スーニ . 2006.『教科書とイデオロギー』名古屋大学大学院国際開発研究科 2006 年度博士論文.

フレス - キム・スーニ . 2004.「北朝鮮のイデオロギー教育について」『東北アジア朝鮮民族の多角的研究』（櫻井龍彦編）ユニテ.

フレス - キム・スーニ. 2003.『小学校国語教科書の言語使用に見られる朝鮮半島の南北言語相違の現象』名古屋大学大学院国際開発研究科 2003 年度修士論文.

梁官洙. 1994.『韓国民族民主主義運動の軌跡 1980~1992』拓殖書房.

リクール , P. (P.Ricoeur). 1980.『解釈の革新』（久米博ほか訳）白水社.

강정구. 2000.『현대 한국사회의 이해와 전망』한울아카데미（カン・ジョング. 2000.『現代韓国の理解と展望』ハンウルアカデミ）.

권혁범. 2000.「반공주의 회로판 읽기」『탈분단시대를 열며 - 남과북 , 문화공존을위한 모색』（조한혜정 외편집）삼인（グォン・ヒョクボム. 2000.「反共主義回路板の解読」『脱分断時代を迎えてー南と北、文化共存のための模索』サミン）.

국어교육학회편 . 2003『국어교육 연구의 반성과 전망』역락（国語教育学会編. 2003.『国語教育研究の反省と展望』ヨクラク）.

남기심 , 고영근. 2001.『표준국어문법론』탑출판사（ナム･キシム、コ･ヨングン. 2001『標準国語文法論』タプ出版社）.

르불 , O. (O.Reboul). 1980.『언어와 이데올로기』(홍재성역) 역사와비평사、2003 (Reboul. O. 1980. Language et Idéologie.(ホン・ジェソン訳) 歴史と批評社、2003).

박태균. 2005.「역사 쓰기와 다시 쓰기」『해방 60 년의 한국 사회』한울아카데미(パク・テギュン. 2005.「歴史の記録と再記録」『解放 60 年の韓国社会』ハンウルアカデミ).

이기훈. 2005.「한일 관계의 현대사」『해방 60 년의 한국사회』한울아카데미 (リ・ギフン. 2005.「韓日関係の現代史」『解放 60 年の韓国社会』ハンウルアカデミ).

중앙일보. 2005.『아! 대한민국 - 한국현대사 40 년』랜덤하우스 (中央一報. 2005.『ア! 大韓民国—韓国現代史 40 年』ランダムハウス中央).

허강. 2004.『한국의 검인정교과서』일진사 (ホ・カン. 2004.『韓国の検認定教科書』イルジン社).

DUSANDONGA 百科事典

『대사전』大辞典 1982 삼성출판사

『大辞林』三省堂

Apple, M and Christian-Smith, L. (1991). The politics of the textbook. In M. Apple and L.Christian-Smith (ed.) *The Politics of the textbooks*. Routledge.

Arendt, H. (1972). *Le système totalitaire*. Seuil.

Benveniste, E. (1966). *Problème de la linguistique générale.* Gallimard

Bourdieu, P. (1976A). The school as a conservative force: scholastic and cultural inequality. In R. Dale (ed.) Schooling and Capitalism. Routledge.

Bourdieu, P. (1976B). System of education and systems of thought. In R. Dale (ed.) *Schooling and Capitalism*. Routledge & Kegan Paul.

Bourdieu, P. (1980). *Le sens pratique*. Minuit .

Bourdieu, P and Passeron, J.P. (1970). *La Reproduction*. Minuit

Bybee, J. and Hopper, P. (2001). Introduction to frequency and the emergence of linguistic structure. In Bybee, J. and Hopper, P. (ed.) *Frequency and the emergence of linguistic structure* John Benjamins.

Dalem, A. (2005). Idéologie dans *Dictionaire culturel en Langue Française*. Robert.

Durkheim, E. (1985). *Education et sociologie*. Presses Universitaires de France.

Foucault, M. (1969). *L'archéologie du savoi*r. Gallimard

Fairclough, N. (1989). *Language and Power.* Longman.

Maingueneau, D. (1984). *Genèse du discours*. Pierre Mardaga Editeur.

Marx, K and Engels, F. (1964). The German ideology. Progress Publishers.

Meillet, A. (1926). *Linguistique générale et linguistique historique*. Champion.

Mey, J. (2001). *Pragmatics*. Blackwell.

Lee, B.H. (1985). *Recherche sur le changement linguistique selon l'idéologie*. Thèse de Doctorat de l'Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales (France).

Luck, A. (1988). *Literacy, Textbooks and Ideology : Postwar Literacy Instruction and the Mythology of Dick and Jane*. The Falmer Press.

Pêcheux, M. (1975). Mises au point et perspectives à propos de l'analyse automatique du discours. Dans Langage, 37, 7-80.

Pêcheux, M.（1981）. *La Langue Introuvable*. François Maspero.

Pêcheux, M.（1983）. *Language, Semantics and Ideology*. The Macmillan press Ltd.

Stubbs, M.（1996）. *Text and corpus analysis*. Blackwell.

Stubbs, M.（2001）. *Words and Phrases*. Blackwell.

Van Dijk, T.（1995）. Discourse, Opinions and Ideologies. Current issues in language & society. Vol 2(2). 115-145.

Van Dijk, T.（2003）. Critical Discourse Analysis. In D.Schoffrin, D.Tannen and H.E.Hamilton (ed.) *The Handbook of Discourse Analysis*. Blackwell.

Williams, R.（1976）. Base and superstructure in Marxist cultural theory. In R. Dale(ed.) *Schooling and Capitalism*. Routledge.

Wodak,R. de Cilia. Reisigl,M. Liebhart,K.（1999）. The Discursive Construction of National Identity. Edinburgh University Press.

Wodak, R. and Reisigl, M.（2003）. Discourse and Racism. In D.Schoffrin, D.Tannen and H.E.Hamilton (ed.) *The Handbook of Discourse Analysis*. Blackwell.

Young, M.F.D.（1971）. An Approach to the Study of Curricula as Socially Organized Knowledge. In M.F.D.Young (ed.) *Knowledge and Control*. Macmillan.

Zinken, J.（2003）. Ideological imagination. Discourse & Society, Vol 14(4),507-523.